

広島大学

留学生日本語教育

第1号：現状と課題



ま え が き

近年、日本における外国人留学生の数は、増加の一途をだどっているにも関わらず、日本の当局の外国人留学生に対する対応は、必ずしも充分とは言えない。以前から議論されている学位に関する問題点や、種々の留学生のニーズに対応できる諸大学院の整備に関する問題点等の解決は、まだ充分には見られていない。さらに、留学生の増加に比例して、多様な留学生のニーズに対応する日本語教育の整備等に関する問題点も多くなってきている。最近、留学生の日本語・日本文化教育あるいはその方法の大切さがしばしば論じられているが、それは、留学生の抱えている生活レベルの悩みや問題点も、留学生の日本語の能力や日本文化の理解の仕方によって解決できるところがあるからであろう。

広島大学でも、年々留学生の数が増え、多様な留学生のニーズに対応できる日本語教育の整備が考えられなければならない昨今である。これに関しては、今までにも色々な機会に訴えられ、また、種々の委員会や会議等でも議論されてきたが、まだまだ問題点は山積している。

広島大学の外国人留学生の日本語教育に携わっている教育学部の「日本語・日本事情」と「外国人留学生日本語研修コース」も、したがって、様々な問題点と直面し、その都度考えさせられている。そして、広島否日本の社会が、まだまだ外国人留学生(あるいは一般的に外国人)に対して、あるいは日本語教育に対して十分な理解を示してくれていないことも考えさせられる点である。

このような折り、広島大学の外国人留学生の日本語教育に関して、大方のより良い理解を得るために、当「日本語教育」の現状と問題点について少々詳しく論じてみようとして提案されたのである。これは、各機関で日本語教育に携わっておられる方々への参考に供することができるとともに、外国人留学生が広島大学の外国人留学生の日本語教育に関してより確かな情報を得るためにもなるので、それを研究報告書の形にして、この案を実行に移すことになった。

それが、この「広島大学留学生日本語教育」である。今回、創刊にあたっては、上に述べたような事情を考慮し、「広島大学の日本語教育の現状と課題」を特集にしているが、今後は、日本語教育に関する研究報告や論文あるいは情報を掲載していくつもりである。

なお、今回、以上のような主旨でこの研究報告書を成すにあたって、多くの関係の機関や先生方には、色々のご無理をお願いしたり、ご迷惑をおかけしたりした。この場を借りて感謝の意を表したい。

挨拶

教育学部長 山本多喜司

国際化の進展に伴い、わが国の大学における留学生の数も増加している。これらの留学生に対して、そのコースに応じて日本語教育、専門教育を施し、留学の目的を達成させ、日本の大学に学んで良かったという満足感を持って帰国させることは、大学としてはもとより、国策としても重要である。しかし、受け入れ体制、指導体制、教育課程、教育方法、教材開発、指導者の養成、相談体制、宿舍問題等、これから研究し、解決しなければならない数多くの問題があり、ようやくその緒につき始めたばかりといっても過言ではない。

広島大学では、留学生の日本語教育について、昭和48年のスタートから約15年の経験を持っている。この間、留学生の増加につれて、「日本語日本事情」、「日本語研修コース」、「教員研修留学生」、「日本語日本文化研修留学生」など多様なコースが、年次的に開設され、若干の教官定員、事務官定員がつけられてきた。それぞれのコースは、その目的、性格の違いによって学生の日本語・日本文化学習へのレディネスとニーズは異なり、彼らに対する教育課程も指導法も違ったものが用意されている。同じ日本語教育といっても、予備教育と補習教育では、ずいぶん異なるのである。短期集中型の日本語研修コースでは、学生を3グループに分けて、学級担任制の指導体制をとったことは成功であったが、担任の負担増の問題が起き、非常勤講師や学生チューターの援助によってこの問題を解決している。

教官定員は、教科教育学科国語教育専修にはりつけてあるが、学生、学科の内容等の違いから管理運営上も無理があり、留学生日本語教育の教官を一つにまとめて運営上学科なみの取扱をしている。多様な目的を持つ諸コースを体系的に整理し、教官の役割を分担すると同時に、各種のコースの教官経験を交流することによって良質の教育を留学生に提供できる。また、留学生の持つ諸問題に対するカウセリングの実施とその研究、日本語教育のシラバス、指導法の研究などを目指して留学生教育・研究センターの設置を強く要望しているが、未だ実現を見るに至っていない。私は、留学生に対する当面の日本語指導と「駆け込み寺」的対策（それも今始まったばかりであるが）に追われて、留学生日本語教官の学問的・基礎的研究を怠るならば悔いを後に残すものであると思う。

留学生日本語教育のあり方については、各大学の事情によってそれぞれ異なっている。一人の教官が孤軍奮闘しているところもあれば、非常勤でしのいでいるところもある。それに比べれば、われわれの方はまだ恵まれている。しかし、解決しなければならない問題、これから整備しなければならない問題も多い。広島大学は東

広島市へキャンパスの統合移転実施中で、これまでの留学生日本語教育の反省の上に立って新しいあり方を考える時機にきている。

この度、留学生日本語教育グループの教官が一致して、広島大学の留学生日本語教育の抱える諸問題をさらけ出すと同時に、他大学から寄せられた調査結果に学ぶために、「広島大学留学生日本語教育」を創刊されたことは誠に意義のあることである。これを手始めとして、学部内、大学内はもとより、大学間の関係者の情報・研究の交流の場となるならば、些かなりともわが国の留学生日本語教育に資することができると思信する。

最後に、本誌をまとめられた留学生日本語教育関係の教官ならびに、調査にご協力いただいた各大学の関係者に感謝すると共に、この領域の教育と研究が今後飛躍的に発展することを強く期待するものである。

目 次

まえがき 挨拶 概要

I 広島大学の留学生の推移	1
II 広島大学の日本語教育と日本語学習者	4
1. 広島大学の日本語教育	4
2. 広島大学の日本語学習者	4
3. 日本語教育の授業の種類	8

日本語日本事情

I 日本語初級	11
II 日本語中級	18
III 日本語上級	25
IV 西条キャンパスでの日本語教育	28
V 日本事情	30
1. はじめに	30
2. 現 状	31
3. 今後の課題	36
VI 日本語初級・中級特講	40
1. 対 象	40
2. 目 的	40
3. カリキュラム・教育内容・講師	40
4. 学 生	41
5. 現状と課題	43
VII 日本語・日本文化特別講義	47
1. 日本語・日本文化研修留学生	47
2. 日本語・日本文化特別講義	47
3. 日本語・日本文化特別講義の実施	48
4. 成果と課題	50

日本語研修コース

I まえがき	53
II 広島大学外国人日本語研修コース	54

1. 教育課程	57
2. 教科書・教材	57
3. 「授業」（講義・演習）の進め方	58
4. 科目内容	59
5. 成果発表	60
6. 問題点	60
Ⅲ 日本語予備教育（6カ月）に関する調査	66
あ と が き	
執筆担当者一覧	

概

要

I. 広島大学の留学生の推移

広島大学における外国人留学生の日本語教育は、当然のことながら広島大学の外国人留学生の数に大きく影響を受ける。それを概観するために、まず、昭和50年以降の広島大学の外国人留学生の推移を簡単な表にしてみる。

【表1】 広島大学の外国人留学生の推移（各年5月1日現在）

区分	昭和年	50	～	55	～	58	59	60	61	62	63
留学生総数		64	～	101	～	150	168	179	233	273	329
国費留学生		43	～	59	～	80	93	91	131	141	180
私費留学生		21	～	31	～	40	40	48	57	83	100
広島県費留学生			～	2	～	3	2	2	3	2	3
外国政府等派遣留学生			～	9	～	27	33	38	42	44	46
留学生の出身国数		22	～	21	～	28	32	30	39	35	40
留学生の所属学部等数		10	～	13	～	25	24	25	25	22	24

次に、広島大学の外国人留学生の多様性を見るために、昭和62年5月1日現在の広島大学の外国人留学生の各出身国別、各学部別、各研究科別の全体像を表にしてみる。

【表3】 所属別外国人留学生数（昭和63年5月1日現在）

区分 所属	学部学生			大学院学生						研究生			日本語研修		計
	国費	政府	私費	M			D			国費	政府	私費	国費	政府	
				国費	政府	私費	国費	政府	私費						
1 総合科学部	3(2)									2(1)	1(1)	4(2)			10(6)
2 文学部											1(1)	1			2(1)
3 教育学部			1							25(17)		8(5)			34(22)
4 福山分校										1	2				3
5 学校教育学部			1(1)							7(3)					8(4)
6 法学部												3			3
7 経済学部		2	5(2)							3(1)		7(3)			17(6)
8 理学部															
9 医学部医学科										2(1)					2(1)
10 医学部総合薬学科										1	1(1)				2(1)
11 歯学部										5		2			7
12 工学部	1	6(2)	6							2	4(1)	8(3)			27(6)
13 生物生産学部												1(1)			1(1)
14 理論研										1					1
15 原医研										2(1)					2(1)
16 文学研究科				2(1)		1	1	1							5(1)
17 教育学研究科				1(1)		6(2)	2	1	4						14(3)
18 “(福山)								2	1						3
19 学校教育研究科						2(2)									2(2)
20 社会科学研究科				13(7)		10(7)	3(1)	1	5(1)						40(16)
21 理学研究科				4(3)	3	1	6(2)	1	1						16(5)
22 医学系研究科					1(1)		8(1)		1(1)						10(3)
23 歯学研究科							6		1						7
24 工学研究科				10(1)	2(1)	7(4)	23	14(2)	7(1)						63(9)
25 生物圏科学研究科				9(1)	3(1)	1	14(6)								27(8)
26 日本語研究生													21(4)	2	23(4)
計	4(2)	8(2)	13(3)	39(14)	9(3)	36(15)	65(10)	18(2)	20(3)	51(24)	9(4)	34(14)	21(4)	2	329(100)
				84(32)			103(15)						23(4)		
	25(7)			187(47)									23(4)		

()内は女子で内数

M：修士課程（博士課程前期） D：博士課程（博士課程後期）

以上のように多様な外国人留学生を、いくつかの限られたグループあるいはクラスに分けて、日本の授業が行なわれなければならない、この点からも多くの問題が生じているのである。

Ⅱ. 広島大学の日本語教育と日本語学習者

2.1. 広島大学の日本語教育

前頁の表 2、表 3 を一見しただけでも、広島大学の日本語教育と一口に言っても、それほど単純ではなく、色々な問題を含んでいる事が分かる。それは、前表のような留学生の多様性（出身国別、専門分野別、日本語能力別）に対応する日本語教育が考えられなければならないからである。

ところで、現在、広島大学の外国人留学生の日本語教育は、おおざっぱに言って、教育学部の

「日本語・日本事情」

「外国人留学生日本語研修コース」

の2つの部所が担当している。広島大学の日本語教育は、教育学部の日本語・日本事情が中心的に担ってきたが、外国人留学生の日本語教育は、昭和48年に、教育学部の国語教育学の中に軒先を借りたようなかたちで開設され、初めは国語教育学の教官がその余分の労を取っていた。そのうち、昭和50年には、国語教育学の中に正式に一人の専任教官を得て「日本語・日本事情」が付置されている。今日では、借りの助手2名を含めて、専任教官は4名（日本語研修コースの専任2名は、組織的にはここに含まれないが、これを含めると、合計6名）になり、広島大学の留学生のための日本語教育を中心に押し進めている。さらに、昭和60年10月には、日本語研修コースが、専任教官2名を得て開設され、見るべき成果を上げている。このコースは、正規には日本語・日本語事情とは別であるが、現在は、両者が相互に助け合って、広島大学の日本語教育にあたっている。

広島大学の日本語教育に対する専任教官は、以上のような陣容であるが、これだけではとうてい対応できないため、学部内外の教官に兼任の形で援助を願ったり、学外からも多くの非常勤の先生方に援助してもらっている状態である。

2.2. 広島大学の日本語学習者

ところで、広島大学でなんらかの形で日本語教育を受けている留学生は、前表の約四～五割に上り、留学生の多様性（表参照）の面から見ても、複雑である。そこで、広島大学で日本語教育を受けている受講生を、大まかではあるが次のようなグループに分けて、日本語・日本事情の日本語教育に関する問題点を挙げてみよう。

- ① 日本語研修コース留学生（予備教育）
- ② 教員研修留学生（補習）
- ③ 学部生（正規の単位が必要－正規の授業）
- ④ 大学院生（補習）
- ⑤ 研究留学生（大学院，学部に所属－補習）
- ⑥ 日本文化研修留学生（補習）
- ⑦ その他（補習）

(1) 日本語研修コース留学生（予備教育）

外国人留学生日本語研修コースは、中国，四国地方の各国立大学の大学院に進学するための日本語予備教育として、6ヶ月間の集中的日本語研修コースである。

日本語研修コースに関わる問題点もまた多いが、このコースは、性格がはっきりしているので、別に項目を立てて述べる。

(2) 教育研修留学生（補習）

このグループの研修プログラムは、昭和55年に始まり、毎年大きな成果を上げているようである。ところで、このグループの大多数は、日本語の集中的特別講義を受講しなければならないように、プログラムが組まれている。このプログラムによると、日本語教育の時間は、年によって多少の違いはあるが、大体週に12～15時間である。これで、日本語は相当上達するはずであるが、実際には個人差もあり、日本語演習プログラムは、必ずしも成功しているとは思えない。それは、次のような問題点があるからである。

このグループの日本語教育の問題点の一つは、日本語学習のモチーフの弱さであろう。例えば、研修留学生の専門の研究室での研修や研究のための討論は英語で行なわれる場合も多く、極端には、指導教官に、研修や研究のための討論は英語で行なうから、日本語は習得できなくてもよいというような指導を受ける場合もあるようである。後者の場合には、留学生にとって、日本語の授業は、ほとんどナンセンスになってしまうのである。確かに、半年や一年で、研修や討論ができるような日本語の実力をつけることは、やや高齢の研修生達にとって難しい事ではある。

また、彼等の多くは、日本語を習得するために日本へ来たのではないし、日本語をある程度習得しても、帰国してからほとんど役には立たないようであるから、仕方が無いと言えば仕方が無い。しかし、仕方無く日本語に取り組んでいる者と、日本での研究や生活のために、さらに帰国してからもなんらかの形で日本語を役に

立てようと思って本気で日本語に取り組んでいる者との間には、日本語学習の姿勢にも大きな差が生じ、それがクラスの進行に時として大きな障害ともなるのである。

さらに、このグループの中には、日本語の堪能な留学生（特に、中国、韓国からの研修生）が数名含まれており、彼等は、日本語・日本事情の開設している中・上級クラスに出席している。しかし、研修プログラムと日本語クラスが重複する場合もしばしばあり、問題は残されている。

(3) 学部生（正規の単位が必要－正規の授業）

学部生の場合、第一外国語としての正規の単位が必要であるが、学期によっては、教養課程あるいは専門の必修授業と重なって、うまく単位が取得できないと訴える学生もいる。これは、一口に言って、学部生が多学部の多専攻に渡っているからである。同一の専攻に属する学生は、多くても2～3名で、それらをグループ分けすると十数組になり、これらのグループ全てに合わせた上級レベルの日本語の授業を組むことは、現状では、専任教官の数の面からも無理である。しかし、これらの留学生が何とか単位を取得できるように、できるだけ多くの授業を開設しなければならない。

(4) 大学院生（補習）

大学院生の多くは、日本語の授業には出席しない。当然と言えば、当然である。日本語の堪能な人、日本語は堪能ではなく日本語の授業が必要であるが、時間的に日本語の授業に出席できない人、日本語は堪能ではないが、日本語は必要でない人など、彼等は、専門分野の研究に精を出して、それぞれ立派な研究成果を上げているようである。

彼等の中には、学期始めだけ日本語の授業に出席するが、そのうち出席しなくなる者、適当に、しばしば欠席する者もいて、クラス編成の面から言っても、小さからぬ障害になる場合もある。ただ、日本語が堪能ではなく日本語の授業が必要である留学生のためには、初級レベルから上級レベルの彼等のニーズに合った日本語の授業が必要であり、そのような授業が組めていないのも現状である。

(5) 研究留学生（大学院、学部）に所属－補習

このグループが一番大きな問題を抱えている。それは、留学生達の専門分野あるいは母国語の多様性（cf.表 2.3）に加えて、日本語の実力の格差があるからである。

したがってこれらの留学生のために、大まかに分けて、日本語の初歩レベルのクラスから上級レベルのクラスまで、多くのクラスを開設しなければならないのである。

正規には、初級レベルのクラスを開設する必要はないのであるが、現実には、初級レベルの日本語教育を希望する者も少なくなっている。この初級レベルの日本語教育に費やすエネルギーをもっと中級や上級レベルの日本語教育に注げば、そこのカリキュラムは充実したものになるであろう。

初級レベルの日本語学習者の抱える大きな問題点のもう一つは、学期により、受講生の数が不定だということである。ある学期には受講生が一人ということもあった。しかし、今学期は、すでに15名を越えている。これだけの人数のクラスで、このレベルの学習者に週約8～10時間（4～5コマ）で、ある程度の日本語の運用能力を付けてやることは、易しいことではない。また、このグループの中には、広島大学の外国人客員研究員や外国人講師も、時として含まれている。

これらの問題点は、大学レベル、学部レベルで、もう一度考えてみなければならない。

さらに、このグループに関する問題点の一つは、留学生の日本語学習に対する動機・情熱・価値観と彼等の専門教育との関係に対する意識の中にある。例えば、専門の研究が忙しいと言って、だんだん日本語の授業に出てこなくなる学生もいるのである。これは、せっかく学期始めに、プレイスメントテストもして、適当なクラス編成をした担当教官の努力を無駄にする。教室に残った留学生にとっても、日本語教育担当教官にとっても、大きなショックなのである。しかし、これはまた、研究留学生の性格を考えると、仕方無いのである。このグループの日本語学習者が、一番数が多くて、一番実体がないと言ってよいであろう。この実体のないグループにも、日本語教育のエネルギーは注がれているのが現状である。

(6) 日本文化研修留学生（補習）

このグループは、近年大いに力を入れて受け入れられている。数年前までは、数人だったのが、昭和61年度は10名、昭和62年度は13名と増大している。それに伴って、特に日本文化に関連した特別講義も、学内外の先生に依頼して、開設している。

特別講義としては、まだまだ試行錯誤の段階であるが、日本文化のさまざまな側面について、より深い知識と理解を得させることを目的とし、様々な講義あるいは講義に合わせて随時実地見学も行なっている。

しかし、これは特別講義謝金で組まねばならず、予算確定のぎりぎりまで計画の実行を待たねばならないので、実行に当たって少々支障が出てくる。少し無理をして

計画を立てたりすると、留学生の都合がつかなくなったりすることもある。また、日本文化研修といえども、十人十色であり、必ずしも全ての講義に興味があるわけではないので、出席者数も一定していない。講師の先生方には、大変失礼なことになることもあり、このグループの留学生をいかに把握し指導していくかは、けだし易しくはない。

また、このグループにも、実際には、日本語の実力に、かなりの差があり、上級レベルの日本語のクラスの細分化も考えられなければならない。確かに、留学生の中には、多人数のクラスを嫌い、小人数のクラスでの活発な討論のできる授業を望む留学生も多いのである。ただし、その声を充分反映したクラスを編成しようと思えば、専門教官の増員が不可欠の要望となろう。スタッフの充実は、留学生教育を通じた大学の国際化にもつながるはずである。日本の大学の国際化を検討するとき、日本語教育のサービスの面からも考えていかなければ、多くの留学生を呼んでも、充分に親切とは言えないばかりか、逆に不信感さえ抱かせてしまうのである。

(7) その他（補習）

このグループには、広島大学の客員研究員や、外国人講師などが含まれ、初級・中級レベルの日本語のクラスをますます複雑にしている。

以上述べたように、(3)～(7)のグループは、それぞれ個々の問題点をもっている上、それら全てを一緒にした集団を相手にカリキュラムを組まなければならない、問題点はますます複雑になっている。

そうした複雑な問題点を解決していくためには、2.2の(5)でも述べたように、本来の日本語教育の姿、個々の留学生の側面を考慮して、大学レベル、学部レベルの方針を明らかにしなければなるまい。親切に手を広げ過ぎれば、正規に親切にされるべき留学生にとっては不親切になるという場合も考えられる。どこまで親切にするのか、切り捨てるべきは切り捨てるのか等も、充分検討すべき時にきているようである。

2.3 日本語教育の授業の種類

ここで、日本語・日本事情が担当している広島大学外国人留学生の日本語教育の授業の種類をおおざっぱに分けて見ると以下ようになる。

- ① 各学部に在籍する外国人留学生（学部生）の外国語としての日本語の単位修得のための授業

- ② 各学部にて在籍する外国人留学生（学部生）の人文科学系の単位修得のための代替授業
- ③ 大学院の各研究科にて在籍する外国人留学生（大学院生）のための日本語補習授業
- ④ 各学部、各研究科にて在籍する外国人留学生（研究生）のための日本語補習授業
- ⑤ 教育学部と学校教育学部にて在籍する教員研修留学生のための特別日本語授業
- ⑥ 各学部にて在籍する日本語・日本文化研修留学生の日本語の授業と日本文化特別講義

これらの授業をカバーするため、また様々なグループに属する外国人留学生の日本語教育のために、便宜的なところもあるが、おおざっぱに外国人留学生の日本語能力別に分けて、初級、中級、上級レベルの日本語授業あるいは日本事情の授業を、それぞれ色々な組合わせで開設している。

なお、現在、広島大学のキャンパスは、本部のある千田キャンパス（教育学部はここにある）、霞キャンパス、東雲キャンパス、西条キャンパス、福山キャンパスに分かれていて、留学生はそれぞれのキャンパスで研究しており、このような状況下でどのようにカリキュラムを組むかというのも大きな問題である。千田キャンパスに近い霞、東雲両キャンパスにて在籍する留学生は、千田キャンパスに来てもらっている。

西条キャンパスにも日本語・日本事情の授業、すなわち日本語初級、中級、上級、日本事情の授業を開設しているが、西条キャンパスにて在籍する留学生のなかにも千田キャンパスまで来て日本語の授業に出席しているものも若干名いるようである。

福山キャンパスでは、大学の学生部の委嘱という形で日本語の授業が開設されている。

そこで、日本語・日本事情で開設しているここ三年ぐらいの授業科目を概観してみる。

○千田キャンパスでの授業

	61 年 度	62 年 度	63 年 度
日 本 語 初 級	I-1, I-2, II-1, II-2,	I-1, I-2, II-1, II-2,	I, II, III, N,
日 本 語 中 級	I-1, I-2, II-1, II-2, III	I-1, I-2, II-1, II-2, III	I, II, III, N, V, VI,
日 本 語 上 級	I, II, III	I-1, I-2, II-1, II-2, III	I, II, III, N, V,
日 本 事 情	I, II	I, II	I, II, III (1, 2)
日 本 語 特 講	(450+ α h/y)	(450+ α h/y)	(450+ α h/y)
日本文化特別講義		(30h/y)	(30h/y)
日本文化特別講義		(28h/y)	(60h/y)
合 計	一週間40時間	一週間48時間	一週間52時間

○西条キャンパスでの授業

	61 年 度	62 年 度	63 年 度
日 本 語 初 級	I-1, I-2,	I-1, I-2,	I, II,
日 本 語 中 級	I-1, I-2,	I-1, I-2,	I, II, III,
日 本 語 上 級	I, II,	I, II,	I, II,
日 本 事 情	I,	I,	I,
合 計	一週間14時間	一週間14時間	一週間16時間

○福山キャンパスでの授業（学生部開設）

	61 年 度	62 年 度	63 年 度
日本語中・上級	I-1, I-2,	I-1, I-2,	I-1, I-2,
合 計	一週間4時間	一週間4時間	一週間4時間

以上のように、千田キャンパスでは外国人留学生のニーズに応えるべくできるだけ多くの授業を開設しているが、それでも、まだ十分に外国人留学生の期待に応えているとは言えないのである。西条キャンパスや福山キャンパスでの現状と問題点は、推して知るべしであろう。

日本語・日本事情

I. 日本語初級

日本語・日本事情「初級」は、日本語学習の経験がないか、またはほとんどない学生のためのプログラムであり、「初級」Ⅰ，Ⅱ，Ⅲ，Ⅳの4つの授業科目から成り立っている。「日本語学習の経験がほとんどない」ということをどう規定するのかわむずかしい問題であるが、学期はじめに行うプレイスメント・テストの結果を留学生日本語教室会議で検討し、他のレベル（中・上級）との調整を経て、「初級」クラスの受講者を決めることにしている。ただ、「初級」クラスの既習者は再受講できない決まりになっているので、おおよその目安としては、「初級」の時間数(100(分)×4(クラス)×15(週)=6,000(分)=100(時間))以下の学習経験とそこで習得した日本語能力しか持たない者ということになろう。1987年度後期(10月から翌年3月)及び1988年度前期(4月から9月)(現在進行中)の「初級」Ⅰ，Ⅱ，Ⅲ，Ⅳ，それぞれの「単位数」「担当教官名」「授業内容の概略」は、次のようになっている。(これは教育学部の「学生便覧」に載っているものと同じ。)

授業科目	単位	担当教官	授 業 内 容
日本語初級Ⅰ	2	長 友	日本語学習経験のほとんどない学習者を対象に発音・文字・基本文型を教える。
日本語初級Ⅱ	2	細 田	日本語学習経験のほとんどない学習者を対象に問題演習を行う。
日本語初級Ⅲ	2	岡 崎	日本語学習経験のほとんどない学習者を対象に読解指導を行う。
日本語初級Ⅳ	2	岡 崎	日本語学習経験のほとんどない学習者を対象に聴解・会話演習を行う。

中・上級クラスと比べて、この「初級」クラスの最大の特徴は、それが「初級」Ⅰ，Ⅱ，Ⅲ，Ⅳの連携による一貫性のある日本語教育を目指しているということであろう。「発音・文字・基本文型」(初級Ⅰ)→「問題演習」(初級Ⅱ)→「読解・聴解・会話演習」(初級Ⅲ，Ⅳ)，もっと簡略化すると、「文法」→「ドリル」→「応用」という3つの段階を1つのサイクルとして、毎週特定のレッスンまたはトピックのもとにワン・サイクルずつ回転するように、3教官が連携して授業運営を行っている。(受講生は「初級」Ⅰ，Ⅱ，Ⅲ，Ⅳ全部を受講するという条件のもとに、「初級」クラスに登録できることになっている。)
「初級」Ⅰ，Ⅱ，Ⅲ，Ⅳそ

それぞれのクラスが週1回100分の授業を、原則として15週間行うことになっているから、ワン・サイクルを400分（6時間40分）として、それが15回回転することになる。現在のところこのサイクルはスムーズに回転しているように思われるが、連携といってもその実態は、授業の進み具合を記録したノートによる情報交換だけであり、今後いかにこの連携プレーを深め、真に一貫性のある体系的な日本語教育を実現していくのが1つの大きな課題であるといえる。

現在、「初級」Ⅰ、Ⅱでは教材として『日本語初歩』（国際交流基金）を使用しているが、「初級」Ⅲ、Ⅳでは特定のテキストは使わず、担当教官（岡崎）の創意・工夫に任せる形をとっている。ただ、談話能力の養成を目指している「初級」Ⅲ、Ⅳで取り上げるトピックは、原則として「初級」Ⅰ、Ⅱでカバーする『日本語初級』のレッスンのトピックと相応するようにしてあるので、単にトピックだけでなく、そのトピックの中で使われる文型や語彙も必然的に「初級」Ⅰ、Ⅱと相応したものが多く出てくることになる。

『日本語初歩』は一週間に1課の割合で進むことにしているので、第1課から始めるとすると、15週間丸まる授業できたとしても、第15課までしか進めないことになる。『日本語初歩』は34課から成り、それ全部で1つのまとまりのある「初級」の内容となっている。従って、15課まで進んだとしても、「初級」の受講生はそこで放り出されるわけだから、文法事項を取り上げただけでも、不十分で中途半端なシラバスしかこなせないという結果になり、このやり方には問題が残る。現実的には、「初級」修了生が次に進む「中級」前半のどれかのクラスで『日本語初級』の続きの部分をカバーしてもらうよう配慮することによってこの問題は処理しているわけであるが、その「中級」クラスとの組織的な連携は事実上ないというのが実態である。今後とも『日本語初歩』を使うにしても使わないにしても、「中級」との連携も考慮した上で、6カ月の「初級」のシラバスをこれからどのように1つのまとまった体系的なものにしていくのか、大きな課題である。また、それ以前のより根本的な検討課題として、「初級」を半年という期間で終えるということの是非も今後検討していかなくてはならないであろう。

「初級」の受講生の数は、1987年度後期が 名、1988年度前期（現在）が6名と5～6名から12～13名の間で揺れ動いており、実際のところ毎学期蓋を開けてみるまでは予想もつかないというのが実情である。

受講生はこれまでのところ研究生が最も多く、ほかには外国人（客員）教師、研究員などさまざまである。これらの受講生を大きく2つのグループに分けると、漢字圏と非漢字圏に分けられる。現在、留学生日本語教育教室では受講生を漢字圏と

非漢字圏に分けた教育はしない方針をとっているが、「初級」では、特に談話指導を中心に、むしろ積極的に漢字圏（中国・台湾）と非漢字圏をミックスした授業を展開するようにしている。もちろん、文字、特に漢字の指導においては、漢字圏と非漢字圏に対してそれぞれ違った対応を迫られるし、もし、漢字圏の全員がまったく英語を解さないとすると、文法等の「説明」の際に英語を媒体として使うことのあるわれわれ教官にとってはお手上げの状態になり、教授法を改めざるをえなくなるわけであるが、これまでのところ漢字圏の受講生の中に一人や二人は必ず英語から中国語への通訳の役割を果たしてくれる者がおり、その者たちの助けを借りて授業を運営してきた。

次に、「初級」のそれぞれのクラスの「目標」「シラバス」「カリキュラム」「教材」「問題点」等について、詳述する。¹⁾

初級 I.

【目 標】

基本文型と会話文の文法的説明、読解、口頭練習を通して、基本的な文法知識と漢字の読み書きを含む読解力、および現実の場面に即してその知識を生かせるような運用力を身につけさせること。

【シラバス（内容）および教材】

『日本語初歩』（国際交流基金）の第1課から進めるところまでの各課にある「文の型」と「本文」（会話文）、『日本語初歩』の副教材「練習帳」「漢字練習帳1」「漢字練習帳2」、および『かな入門』（国際交流基金）の中身。

【カリキュラム（教室活動の実際および教授法）】

おおよそ次のような順序で1回（100分）の授業を行っている。

- 1) 宿題をコメントを加えて返却
- 2) 既習表現を使っての簡単な対話
- 3) 「文の型」の導入
 - ① 文法の説明および読み方の説明と練習
 - ② 「文の型」の例文の数の拡大
 - ③ 「文の型」の例文を使った簡単な口頭練習
- 4) 「本文」（会話文）の導入
 - ① 読み方の説明と練習、および新しい文法の説明
 - ② 「本文」に現れる様々な日本事情に関する説明

- ③ 「本文」の内容を現実に即して変えていく練習
- 5) 前の課の新出漢字に関するクイズ
- 6) その日にカバーした課の練習問題と漢字に関する宿題の配布

練習の仕方としては、原則として、Choral Practice→Pair Practice→Individual Check というサイクルを取ることにしている。

教授法についていえば、特定の教授法に固執することはしないで、Grammar-Translation(文法訳読)，Oral Approach(文型練習，等)，Communicative Approach(実際の場面における会話練習，等)，それぞれの場面に最適と思われる教授法を弾力的に取り入れている。

【問題点，今後の課題】

上記に述べた通りである。

初級Ⅱ.

【目 標】

文法練習を通して日本語初級レベルの聞き，読み，理解する能力を増進すること。

【シラバス】

『日本語初歩』（国際交流基金）第1課から第19課まで。

【カリキュラム（教授法，教室活動）】

以下が各課に共通な授業内活動である。

- 1) 本文の聴解（録音テープを使用）
- 2) 新出語の学習
 - ① 読みの学習（黒板使用）
 - ② 意味の学習（黒板使用）
- 3) 本文の聴解（録音テープの使用）
- 4) 本文の読み練習
 - ① 一斉練習（録音テープとテキスト使用）
 - ② 個別練習（テキスト使用）
- 5) 文法練習
 - ① まるうめ（テキスト使用）
 - ② おきかえ（テキスト使用）

- ③ いいかえ
- ④ といとこたえ

【教 材】

上記シラバスの通りである。

【問 題 点】

列挙すると以下の通りである。

- 1) 学習指導が授業時間内に限定されがちであるため十分な成果を上げていない恐れがある。
- 2) 第1言語を異にする学習者集団を対象としているにもかかわらず、十全な診断的評価、形成的評価を加味した授業実践ができていないため、各学習に応じた指導となりえていない。各人に最適な学習方法の指導が必要である。
- 3) 上記2)と関連して、教室内学習と自宅学習とをどう調和させるかの検討も必要であろう。
- 4) 「初級」Ⅰ，Ⅱ，Ⅲの授業との連携を一層深め、日本語初級授業の効率化が望まれる。

初級Ⅲ，Ⅳ（ニーズに対応した談話基底の指導）

1. はじめに —今年度の課題—

初級においては、昨年度より、導入、練習各一コマを細田、長友の両先生、他の二コマを言語使用の時間として筆者岡崎が担当している。ここでは筆者担当の部分について言及する。

昨年度から目指しているものは、初級レベルにおける談話能力の養成である。周知のように、初級においては、語彙力、構文力獲得途上にあり、談話の指導はあるがままの形では困難である。それをどう克服するかが課題とされる。これに対し昨年度「談話を基底とした初級指導」として、授業の全過程を談話の形成を媒介とする形式の一定の確保を見た。

今年度は、いかにして「談話を基底とした指導」を学習者のニーズに対応したものにしようかということ課題としている。

2. 第一次ニーズ分析：複合シラバスを前提とするニーズの分析の実施

ニーズの分析は基本的には二段階に分けて行った。第一段階は、Mumby (1978) を修正した包括的なもので、学習者の全般的な情報の収穫と共にどんな種類のニーズを持っているかを調べることを重点にコース冒頭に行った。これは Yaladen

(1986)で Proto-syllabus とよばれ、コース開始前に予め学習者の基本的なニーズの領域を特定した上でコース中の pedagogical syllabus に骨格を与えるためのものである。この第一次ニーズ分析の結果、ニーズの広がりには明らかに様々な話題、ファンクションを含んでおり、コースの中軸としては単一シラバスではなく、少なくとも文法シラバスの他に機能シラバス、トピックシラバスの三本を柱とする複合シラバスが適切であることを示した。

3. 第二次ニーズ分析：変化するニーズの掌握のためのニーズ分析の実施

第二段階目は現在を含めコース中に行っている何度かの分析である。ニーズ分析はコース冒頭に大がかりなものが一度行われるのが一般的なあり方である。ここでは、それを更に一歩進め、ニーズは「学習者が日本で生活する中で(1)変化し、(2)あらたに発見され、又(3)コースを通して自覚されていくようなもの」という前提に立った。この過程でのニーズの変容を緻密に掌握することによって、高い動機に裏打ちされたものを教室での活動として取り上げることができるからである。

4. 教室外の活動に直結する談話指導の基礎としてのニーズの分析

Kramersch (1980)、岡崎 (1986) によって指摘されているように教室内の談話は教室外のそれと内容、形式を大きく異にしている。ここでは構文の知識が十二分に獲得されているのにそれが談話の中で使い切れない原因をこの教室内外の談話の相違にもとめ、教室外での談話活動を指導の対象として取り上げ、昨年度来教室内外の活動の質的連結を目指している。今年度のニーズ分析もこれを更に展開するための条件を作り出すことを目指したものとした。

具体的には第二段階のニーズ分析では、質問リストとして、従来 Threshold level で取り上げられた大まかなものに加えて、学習者の言語行動調査から項目を加えて行く可変的なリストを作成し、使用している。このように実際の学習者の言語行動調査からの情報を基礎とすることを図るのは、教室外の言語行動で実際に必要とされる機能、トピックの項目を加えることによって、ニーズ分析の結果カリキュラムに編入され実施される教室活動を教室の外で現実に又自覚を持って使われる基礎をもったものとすることを目指すからである。

この結果ニーズの分析を言語行動調査と直結して行った場合、談話の指導上のメリットの他に、授業過程、更にはカリキュラム全体を実生活上必要とされるコミュニケーション能力の養成を目標としたものとする基盤を得ることができる。

昨年度は、一つの成果として、授業過程の最後の段階として、教室内で実施した談話活動を日本人の友人を相手に外でインタビューするのを中心とした諸形式で行

わせ、その結果を翌日教室で報告させる方式を創出した。今年度は、ニーズ分析を言語行動調査の裏打ちのあるものにする事によって、取り上げる教室内の談話活動を外で学習者自身に必要とされているものとする事を図った。来年度も又教室外活動に直結する談話の指導の強化のための方策の創出を目指したい。

5. 結 語

以上、昨年度から取り組み始めた談話を基礎とした初級指導に踏まえ、今年度課題として取り上げている「学習者のニーズに対応した談話基底の指導」の一端について述べた。具体的な個々のニーズがどのような形でカリキュラムに編入され、どのような教室活動が新たに創出されて来たかについては別の機会にふれることとする。

<授業担当者一覧>

専任・兼任： 岡崎敏雄 長友和彦 細田和雅

Ⅱ. 日本語中級

日本語中級レベルのクラスにも、多種多様な留学生が参加しており、様々な問題が存在する。日本語能力の点から見ると、このレベルのクラスに出席している学習者の日本語能力の差は、一番大きいと言えるであろう。

ここでは、日本語の上級レベルのクラスの現状と課題について、まず、日本語中級のここ三年間の授業とその時間数を概観すると、

	61 年 度	62 年 度	63 年 度
日 本 語 中 級	I-1, I-2, II-1, II-2, III	I-1, I-2, II-1, II-2, III	I (2), II, III, IV, V, VI
合 計	一週間10時間	一週間10時間	一週間14時間

のようにクラスを開設して、学内の留学生のニーズに応えられるようにしている。63年度に授業数が増えているのは、年々増加している外国人留学生のニーズに対応するためである。62年度からは、多くの日本語教育学科の教官が日本語・日本事情の授業を援助して下さるので、時間数を増やすことが可能になったことも付け加えておかねばなるまい。

現状では、外国人留学生の増加とその多様性に対応するのに手一杯といったところであるが、もちろん、より効果的な授業を開設することは、大きな目標であり、63年度から、カリキュラム編成にも改正が加えられている。単純にみれば、日本語中級のⅠ～Ⅲと、日本語中級のⅣ～Ⅵのセットに分かれている。前者のセットでは、日本語初級のⅠ～Ⅳを終えた者あるいはそれと同等の日本語能力をもっている者を対象にしているが、日本語の学習時間でみると、120時間の者から500時間以上学習した者まで様々である。したがって、後者のセットでは、日本語中級のⅠ～Ⅲのセットに出席している学習者よりも日本語の能力は優れていることが期待されている。後者のセットに関しては、また、稿を改めることにして、ここでは、前者のセットに関してすこし述べておこう。

そこで、次に、63年度の日本語中級のⅠ～Ⅲの授業内容を概観すると、

日本語中級Ⅰ－1

日本語初級を終えた程度の学習者に、読解・文法指導を行う。

使用テキスト「日本語初歩」16課～30課／33課

日本語中級Ⅰ－Ⅱ

日本語初級を終えた程度の学習者に、読解・文法指導を行う。

使用テキスト「日本語初歩」16課～30課／33課

日本語中級Ⅱ

日本語初級を終えた程度の学習者に、作文、会話指導、小説、随筆などの講読の指導を行う。

「日本語Ⅰ」「日本語中級」などのテキストを使用，作文と読解。

日本語中級Ⅲ

日本語初級を終えた程度の学習者に、作文、会話指導を行う。

VTRを利用した授業

受講生は、次の三つに大別できる。

1. 学部留学生（「外国語」科目の必修単位として受講）
2. 大学院生，及び大学院研究生
日本語研修コース修了生
日本語コースを通過しなかった学生
3. 日本語・日本文化研修留学生

これらのクラスに出席している留学生の日本語学習時間や日本語の能力には大きな隔たりがあることは前にも述べたが、この事は授業進行に際しても時々問題になる。例えば、日本語中級のⅠでは、「日本語初歩」の16課から30／33課ぐらいのテキストを使用して授業の進行を行なう際に、学習者の中には既にこのテキストを終えているが日本語の実力はないのでこのクラスに出席している学習者もいて、練習問題や小テストを行なう時に、効果的でない場合も出てくる。

授業の連絡は、日本語中級のⅠの1と2が、「日本語初歩」のテキスト中心に行なわれており、日本語中級のⅡ～Ⅲでは、上表のように、日本語中級のⅠで進行している構文、表現を基にした応用練習に主眼が置かれている。こうした授業の進行に関しては、教授者がお互いに連絡帳を利用して、確認しあっている。

今後の課題としては、更に体系的で総合的な授業がくめるように、授業の在り方、目標なども充分議論して検討する必要がある。教授者は、また、相互により密な連絡を取り合わなければならないであろう。

<授業担当者一覧>

専任・兼任： 浮田 三郎 多和田 眞一郎 カッケンブッシュ 寛子

熊取谷 哲 夫 沼 本 克 明 位 藤 邦 生
非 常 勤： 小 林 泰 秀

◆「日本語中級Ⅰ講義」87年度前期（87年4月～87年9月）

視聴覚教材を使い、「聴解」力をつけることを目標にした。16回の講義内容は以下のとおり。

- 教材：1. 国際交流基金編「日本語教育スライドバンク」（1回～9回）
2. テレビ番組「幸せな二人は金の卵を生む」（10回～13回）
3. 新聞記事（14回～15回）
「活気づく結婚仲介産業」『読売新聞』（1985年5月21日）
「一人歩きする個人情報 ～上～ どうなるプライバシー」
『朝日新聞』（1986年2月18日）

1回目（4／16） スライドバンク「行政 ①～③」

※□ スクリプト①～⑩配布。

①～③実施。

2回目（4／23） スライドバンク「行政 ④～⑩」

※□ スクリプト④～⑩終了。

※□ なしスクリプト①～⑩配布。

※□ スクリプト⑪～⑳配布（漢字の読みなどを予習せよ）。

3回目（4／30） スライドバンク「行政 ⑪～⑳」

※□ スクリプト⑪～⑳終了。

※□ なしスクリプト⑪～⑳配布。

※「生産 ①～⑩」導入。

4回目（5／7） スライドバンク「生産 ①～⑩」

※「生産 ①～⑩」終了。

※「生産 ⑪～⑳」導入。

5回目（5／14） スライドバンク「生産 ⑪～⑳」

※「生産 ⑪～⑳」終了。

※「小売店Ⅰ ①～⑳」導入。

- 6回目(5/21) スライドバンク「小売店Ⅰ ①～⑤」
※「小売店Ⅰ ①～⑤」終了。
- 7回目(5/28) スライドバンク「小売店Ⅰ ⑥～⑮」
※「小売店Ⅰ ⑥～⑮」終了。
- 8回目(6/4) スライドバンク「小売店Ⅰ ⑯～⑳」
※「小売店Ⅰ ⑯～⑳」終了。
- 9回目(6/11) スライドバンク「小売店Ⅱ ①～⑩」
※「小売店Ⅱ ①～⑩」の音声テープを、それぞれ四回ずつ聞かせて、書き取らせる。(スクリプトなし)
※最後に通して一回ずつ聞かせる。
(「以上を清書して、6月16日(火)までに提出せよ。」)
- 10回目(6/18) 「幸せな二人は金の卵を生む」
※添削した宿題(「清書」)の返却
※設問プリント配布。それを見(せ)ながら、VTRを見(せ)る。
(設問プリントは、参考資料参照)
※番組内容の大筋の説明。
※設問を読む(音読)。
※音声のテープのみで、設問の「1～3」を考える。
- 11回目(6/25) 「幸せな二人は金の卵を生む」
※スクリプト配布。
※ビデオを、区切って、見る。
※区切りごとにスクリプトを読む。解説。
※区切りごとに、問題を考える。
- 12回目(7/2) 「幸せな二人は金の卵を生む」
※ビデオを、区切って、見る。
※区切りごとにスクリプトを読む。解説。
- 13回目(7/9) 「幸せな二人は金の卵を生む」
※ビデオを、区切って、見る。
※区切りごとにスクリプトを読む。解説。
「幸せな二人は金の卵を生む」終了。

- 14回目（9／10） 「活気づく結婚仲介産業」
- 15回目（9／17） 「活気づく結婚仲介産業」「一人歩きする個人情報」
- 16回目（9／24） 試験

♣「日本語中級Ⅰ講義」87年度後期（87年10月～88年3月）

語彙力をつける（「文型」との関わりにおいてとらえる）ことを主たる目標とした。

教材：『日本語Ⅱ』（東京外国語大学附属日本語学校編）

- 1回目（10／22） 「朝の散歩」
- 2回目（10／29） 「朝の散歩」「果物」
- 3回目（11／12） 「果物」「夏休みの便り」
- 4回目（11／19） 「夏休みの便り」「火の発明」
- 5回目（11／26） 「火の発明」「銀貨や銅貨はなぜ丸いか」
- 6回目（12／3） 「銀貨や銅貨はなぜ丸いか」
- 7回目（12／10） 「天気と我々の生活」
- 8回目（12／17） 「天気と我々の生活」
- 9回目（1／21） 「ぼくのゆめわたしのゆめ」
「箱根八里」「荒城の月」のテープを聞く。
歌詞解説。
- 10回目（1／28） 「ぼくのゆめわたしのゆめ」
滝廉太郎紹介。
「春望」紹介。
- 11回目（2／4） 「東京」
- 12回目（2／18） 「東京」「漢字の知識」
- 13回目（2／25） 試験

参考資料 1. □ スクリプトの例

例をいくつか示す。□ は空白部分。

例 1 : 東京は日本の □ 首都 □ で、政治の □ 中心地 □ です。

例 2 : 各区には □ 区立 □ の図書館があります。

例 3 : □ 稲 □ を植えるために □ 水 □ を □ 浅く □ 入れた田を水田といいます。

例 4 : ここは石油コンビナートです。□ コンビナートの中心には □ , 原油を精製する石油精製工場があります。

例 5 : □ ここは米屋です □ 。米は日本人の主食です。

例 6 : ここは本屋です。本屋では、□ 本や雑誌や地図など □ を売っています。

□ 買うつもりがないのに □ , 本屋で本を読むことを □ 立ち読みと言います □ 。

参考資料 2. 「幸せな二人は金の卵を生む」

— 仲人業戦争の本当の理由 —

1. この番組は、どのようなテーマを目ざしているか。
2. 仲人業は、どのような名前と呼ばれているか。
3. 今回のテーマは何か。
- △
4. この雑誌の売り物は何か。
5. この雑誌御自慢のアイデアは何か。
- △
6. この生理用品会社は、どのような戦略をとっているか。
- △
7. このレコード・レンタル会社は、どのようなシステムをとっているか。
- △
8. 大手スーパーの始めた結婚相談コーナーの売り物は何か。
9. コンピューターをどのように使っているか。

- △
10. 大手企業が、仲人業界に進出しようとしている理由は何か。
- △
11. このレコード・レンタル会社が、今この業界に進出したのはなぜか。
12. 質の高い情報をどうやって集めるか。
- △
13. チェック項目は、いくつあるか。
14. 結婚以前のアンケートとしては、あまり関係のないと思われるような質問まであるのはなぜか。
- △
15. 調査は入会の時だけか。
16. 集まった情報は、企業にとっては、どのようなものとなるか。
- △
17. 多くの企業が仲人業に進出してきた本当の理由は、どこにあるか。
18. この生理用品の会社が考えた将来展開の方法とは、どのようなものか。
19. この会社の場合は、どのようにして商品を提供しようと考えているのか。
20. この会社のキャッチフレーズは何か。
- △
21. マッチング・ビジネスに仲人を頼む人は、たくさんいるのか。
22. 会員を増やすためにどのような戦略をとっているか。
- △
23. 結婚情報のプライバシーは、きちんと守られているか。
24. その理由は何か。
25. コンピューターの情報処理によって次々と結婚が成立するのを、何と言っているか。

Ⅲ 日本語上級

日本語の上級レベルのクラスにも、多種多様な留學生が参加しており、様々な問題が存在する。そこで、ここでは、日本語の上級レベルのクラスの現状と課題について述べることにしよう。

まず、日本語上級のここ三年間の授業とその時間数を概観すると、

	61 年 度	62 年 度	63 年 度
日 本 語 上 級	I, II, III	I-1, I-2, II-1, II-2, III	I, II, III, IV, V
合 計	一週間6時間	一週間10時間	一週間10時間

のようにクラスを開設して、学内の留學生のニーズに応えられるようにしている。62年度、63年度と授業数が増えているのは、年々増加している外国人留學生のニーズに対応するためである。もちろん、より効果的な授業を開設することは、大きな目標であるが、現実には、外国人留學生の増加とその多様性に対応するのに手一杯といったところである。62年度からは、多くの日本語教育学科の教官が日本語・日本事務の授業を援助して下さるので、授業時間数を増やすことが可能になったことも付け加えておかねばなるまい。

次に、63年度の授業の内容を概観すると、

日本語上級Ⅰ

テレビドラマ等の教材を使用して、読解、スピーチ、聞き取り、上級文法、作文を指導する。

日本語上級Ⅱ

日本文学を題材として、日本語の語彙、構文、表現、発想の特徴を追求し、あわせて日本文化の構造と特色を検討する。

日本語上級Ⅲ

読解、文法、作文、スピーチの指導。

日本語上級Ⅳ

作文、読解を柱にした、課題別総合指導を行う。

日本語上級Ⅴ

読解を中心に、日本語の語彙、文法、表現、発想の特徴に関して討論し、日本文化の構造と特色について討論する。

以上のように、できるだけ体系的、総合的にカリキュラムを組むようにはしているが、以前にも述べたように、上級の日本語の授業に出席する留学生等の日本語能力には相当の開きがあり、また、彼等の専門性あるいは性格からくる興味も様々であり、20名位をまとめたクラスに使用するテキストを選ぶのにも苦勞が多いのである。例えば、日本語上級Ⅴに付いて少し詳しく述べてみよう。

日本語上級Ⅴの場合

このクラスでは、プレイスメントテストで相当の日本語の能力があると認められた学生を対象に、日本である程度有名な小説などを講読して、内容の解釈を中心に、日本語の語彙、文法、表現、発想の特徴に注目して学習者の母語と対象させて討論したり、日本文化の構造と特色についても学習者の母国の文化と対照させて討論する。主に次のようなテキストを選んで使用している。

使用テキスト 松本清長、「張り込み」の中から、「張り込み」、「1年半待つて」、「声」、「地方紙を買う女」

松本清長、「点と線」

志賀直哉、「十一月三日午後の事」など。

これらを選んだ理由は、

内容、文体、表現が、クラス全体の学習者に分かり易い。

クラス全体の学習者が、作品に興味を持続する。

作品の中で、日本的発想、日本事情、日本文化に付いて触れられる。

ある程度有名な作品である。

などである。上記の使用テキストを見ると、松本清長の短編集が中心になっているが、それは、上記の理由をかなり満足させてくれるからである。

教室での授業の進行では、まず音読である。学習者全員が、この作業に毎時間最低一回は参加するようにする。ここでは、発音や読み方の矯正ができる。もちろん、学習者の日本語のレベルや人柄を考慮しながら矯正していかなければならない。

次に、作品を読みながら、内容、表現の難解なところや特徴のあるところを、クラス全体の学習者に分かり易く説明をしてもらったり、それについて討論をしたりして、クラス全体の学習者が、作品に興味を持続するようにする。作品の中に見られる日本的発想、日本事情、日本文化についても、学習者自身の経験あるいは母国の事情や文化と対比させながら発言を求めると、活発な討論になることもある。

しかし、やはりクラスの中の日本語学習者の間には、日本語の実力にかなりの差

があるので、思うようにはいかない。例えば、松本清長の「張り込み」の中から、「張り込み」、「1年半待って」などをテキストに使用すると、易しすぎると言う者もいれば、難しいと言う者もいる。内容、表現などに興味を持てると言う者もいれば、そうでない者もいる。特に日本文学を専攻している留学生の中には、上記のような作品では満足しない者もいる。また、作品中に使用されている表現が「現代日本語」であるかどうか、あるいは標準語であるかどうかを気にする学生もいる。そして、彼等の質問は、表現に関する格好の説明材料になる。方言の出て来る場所などでは、標準語との比較などもでき、演習の材料にもなる。

また、年によって、教室での授業の進行の速度が異なることがある。これは、学習者の日本語能力だけに原因があるのではなく、クラス全体の雰囲気やそれ以外の要因も考えられ、期待される通りの討論にもっていけないこともある。したがって、教室での授業の進行をどのようにするかは重要である。

<授業担当者一覧>

専任・兼任：	浮田三郎	相原和邦	奥田邦男
	木坂基		
非常勤：	小林泰秀		

Ⅳ 西条キャンパスでの日本語教育

西条キャンパスでの日本語教育の現状についても少し述べておこう。西条キャンパスでの日本語学習者のほとんどは工学部の学生である。以下に、西条キャンパスでの日本語教育の授業の内容を概観してみよう。

日本語初級Ⅰ（１，２）（４時間）

日本語をほとんど知らない学習者に、発音、文字、基本文型、会話を初歩から指導する使用テキスト「日本語初歩」１課～１５課 / ２０課

日本語中級Ⅰ（１，２）（４時間）

日本語初級を終えた程度の学習者に、読解、文法、会話、作文の指導を行う。
使用テキスト「日本語初歩」１６課～３０課 / ３３課

日本語中級Ⅱ（２時間）

日本語中級Ⅰを終えた程度の学習者に、読解、文法、作文、スピーチの指導を行う。

日本語上級Ⅰ（２時間）

テレビドラマ等の教材を使用して、読解、スピーチ、聞き取り、上級文法、作文を指導する。

日本語上級Ⅱ（２時間）

小説、随筆等を教材として、日本語の語彙、構文、表現、発想の特徴を追求し、読解、スピーチ、聞き取り、上級文法、作文を指導する。

日本語事情Ⅰ（２時間）

日本の文化及び習慣等について考察する。

以前にも述べているように、基本的には、千田キャンパスでの日本語教育の原則と大差はない。時間的には大きな差が有るが、日本語学習者の数の面からいえば、妥当なところであろう。

しかし、西条キャンパスでの問題点は、また多い。以下にその問題点を列挙してみると

教師は、全て非常勤で賄っている。

日本語教師のための控え室、準備室がない。

したがって、教材、資料などの保管が難しい。

本部との連絡が充分できない。

必要な教材、教具などの購入が容易でない。

学習者の数が不安定である。

学習者の日本語のレベルが非常にアンバランスである。

学習者の多くが研究生で、大学院の試験前になると、授業に出席しなくなる。大学院に入学すると、授業に出席しなくなる。

などのような西条キャンパス独特の問題点が挙げられ、早急に解決できる点と、早急には解決できない点とがある。

さらに、今後のことを考えると、広島大学の西条への統合移転に伴い、解決できるものもあるが、今度は逆に千田キャンパスに同様な問題点が生じる恐れがあり、これらの問題点をよく検討して将来に生かしたいと考えている。

<授業担当者一覧>

非常勤： 大槻 温子 小野 由美子 田畑 佳則
 渡部 浩見

V 日 本 事 情

1. はじめに

広島大学に「日本事情」の科目が設置されたのは、昭和50年に教育学部内に「日本語日本事情」講座が開設されて、留学生の日本語教育が履習可能な正規の授業となった時である。文部省が国公立大学に宛てた通知、「外国人留学生の一般教育等履習の特例について」（昭和37年4月14日付）によると、「日本事情」の教育にあたっては、「日本人学生に対する一般科目の趣旨と同様の教育的意図を実現できるように留意」し、その内容も「一般日本事情、日本の歴史、日本の自然、日本の科学といったものが考えられ」、「大学教育の水準に応じた内容を有することを要し、初歩的内容のものは……基準外の扱いとする」と規定している。これにより文部省が意図するところは、大学の1、2年生で日本人学生が一般教育科目を履習するのを、留学生は、日本語および日本事情を履習して日本語能力と日本に関する知識を高め、専門教育にスムーズに移行してゆけるようにしなければならないということである（文部省通知については「日本語教育学会ニュース」第43号、昭和63年3月参照）。

「日本事情」科目についての文部省の基本的趣旨は明確であるが、教育内容については広範で漠然としており、日本に留学している大半の学生の留学期間は1年か1年半という短いものであるので、この期間に彼等の語学力および日本文化理解を専門分野で無理なく勉学できるほど向上させることは、非常に難しいことである。しかし、広島大学の「日本事情」担当教官は、この文部省の設置目的に沿うべく、授業は留学生の日本文化理解に役立ち、ひいては彼等が日常生活と研究分野で無理なく活動を行えるよう、コミュニケーション能力（communicative competence）の開発を直接にも間接にも目標にして、講義、演習の形をとって行っている。

コミュニケーションをすること、即ち、言語の“performance”は社会的行為であり、その行為遂行には、言語（発音、語彙、文法）能力が含まれるだけでなく、それを社会の中でどのように使うかという能力にも大きくかかわっている。つまり、コミュニケーション能力は、対人関係ルールや思考法、価値観などと深く関連している人間の相互作用能力であり、文化と不可分の関係にある。言い換えれば、コミュニケーション能力には、文法（発音と語彙もはいる）と文法外能力が含まれていて、その国の文化の理解なしには、外国人が滞在国の言語を用いてコミュニケーションを行うことは不可能なのである。（言語と文化、コミュニケーション能力について

は、“Editorial Introduction to Language in Society” by Dell Hymes, Language In Society. Vol. 1, 1972, 『外国人とのコミュニケーション』J.V.ネウストプニー, 岩波書店, 1982年等参照) この点において理論的に「日本事情」科目は、「日本語」教育と密接に関連しているのである。それ故、留学生の日本文化に関する知識を高め、留学目的を支障なく達成させることに教育目標をおく「日本事情」は、また、留学生の文法外コミュニケーション能力の向上を目的に設置されている科目でもありとも言えよう。

具体的に広島大学における「日本事情」の発展経緯を概括すると、昭和50年以前に、留学生の「日本語」が学生部に所属していた頃は、「日本事情」は日本語上級・中級クラスで、日本社会における日本語での言語行動を教える中で、彼等の日本語能力の向上を目的として、教育学部の国語教育学の専門家によって教授されていた。正規の授業として開設の後は、国語教育学や英語教育学その他の専門家の協力を得ながら、国語教育学に所属する日本語教育の専門家を中心に、「日本語・日本事情」は発展させられてきた。昭和50年頃よりは、視聴覚機材の使用が以前よりはるかに容易になったために、従来の本やプリントなどの教材を使っただけの教授法に加え、別の角度から視覚聴覚を活用する教材を用いて「日本事情」を教え、学生たちの日本文化に対する理解を深めて、コミュニケーション能力を高めさせてきた。

このように広島大学での「日本事情」の講座は、十余年に亘る歴史を持ち発展の途にあるが、近年留学生の数が増し、広島大学での「留学生日本語教育」そのものが組織的にも変化を遂げようとしている。昭和62年度には、留学生日本語教育の専任が6名に増え、それより一年前には、教育学部に日本語教育学科が新設されて、学部内に日本語教育および日本文化(芸術、文学関係)の専門家の増加が続いている。このような変化期に、「日本事情」のコースも、これまで東千田、西条の両キャンパスで3つのクラスが設けられていたのが、昨年(昭和62年)度は、東千田で4クラス、西条で1クラス、合計5クラスが開設されるという量的な拡がりを見せている。このため、現時点で「日本事情」の授業の内容をも含め現状把握をし、抱えている諸問題の検討をすることは、将来のこれまで以上の質的発展に寄与しうることと考える。それゆえ、ここでは留学生数の急増があった昨年度後期の授業に焦点をあて、広島大学での「日本事情」の現状を紹介し、いくつかの今後の課題を記しておく。

2. 現 状

A. 学生の特徴

最初に昨年後期の「日本事情」のそれぞれのクラスに登録をした学生の人数、国別内訳を表1に示す。延べ89名の学生が、2キャンパスの5つの授業に登録をした。

それらの学生を出身地域別にみると、およそ80パーセントがアジア出身で、17パーセント弱がヨーロッパから来ており、4パーセントがオセアニアの学生である。キャンパス別にみると、西条キャンパスにはアジア出身の学生が集中しており、東千田も多数はやはりアジア人の学生たちであるが、ヨーロッパやオーストラリア・ニュージーランドと異なる文化的背景を持つ学生たちも学んでいる。この「日本事情」に登録した学生の国別分布からも、西条の工学部と生物生産学部には、発展途上国からの学生が日本で発達しているテクノロジーを学んでおり、東千田では教育、文学、総合科学などの学部で、文学や社会科学を世界各地からの学生が研究していることが伺える。

表1 「日本事情」登録者国別内訳（昭和62年度10月）

国名	キャンパス 授業別	東 千 田				西 条
		I-(1)	I-(2)	II-(1)	II-(2)	
オーストラリア			1	1	1	
中 国		4	9	7	10	14
フィリピン			1			
イギリス		2		2	2	
フランス		1	2	1	2	
インドネシア		4	2	4	4	
韓 国		2		2	1	
マレーシア					1	
メキシコ						1
ニュージーランド					1	
タイ		2		2	2	
西ドイツ			1	1		
計		15	16	20	24	15

B. アプローチの多様化

昨年の後期に東千田および西条キャンパスで行われた「日本事情」のクラスの概要は、表2の通りであるが、いずれも週一回、100分の授業が持たれている。

表2 「日本事情」クラス概要(62年度後期)

クラス	教科書及び教材	授業内容
東千田キャンパス		
I-(1)	特になし	日本人の宗教-宗教感情と宗教感, 神仏習合に関する芸術文化についての講義
I-(2)	ビデオ(テレビ)教材, 学生の作品, その他教官による自主教材	日本人の生活がどんな思いを抱きながら暮らしているのかといった普段の生活を知ること重点(講義形式でなく, 学生自身の目で「日本発見」をし, 理解を深めるよう異なる教材を導入)
II-(1)	「日本人」柳田国男編より	教材より, 一般的な日本人の年中行事と一生の行事, 集団志向性などを題材として取り上げ, 現代日本の表層下に留学生にとっては, 異文化である伝統的日本人が現在も存在することを認識させる。(異文化間コミュニケーションの視点より講義, 討論)
II-(2)	NHK ウルトラアイの教材化したものを主に使用。その他日本の歴史, 宗教, 現代技術, 住宅問題などを扱ったテレビ番組	1) 日本人の生活に密着した教材を選び, 日本人の行動様式・思考方法について討議 2) 文字・音声・映像を通して, 日本の社会文化生活様式・思考方法について討議 3) 上級文法及び慣用表現の学習 4) 自国の事情との比較に基づく討論
西条キャンパス		
	ビデオ(テレビ)文字化テキスト, 新聞記事	テレビ番組(ニュース, 日本各地の話題)を題材として, 現在の日本のさまざまな側面を紹介

これらの東千田と西条で行われた5つのクラスのうち, それぞれのキャンパスから1クラスを選び, どのような授業がなされているかの一端を紹介する。

東千田キャンパスで行われた「日本事情」II-(2)の授業であるが, 教材は主にNHK テレビで放映されたウルトラアイを録画したものが使用された。この番組は日本人の日常生活の中から, 身近なテーマを選び, それについての歴史的背景や変遷, 今日のあり様, 地方的または個人的相違などに触れ, 時にはユーモラスな表現をまじえて紹介している。授業の運ばれ方は,

- (1) 最初にビデオを見せる。
- (2) 映されたビデオに関し文字化し用意されたテキストを読ませる。
- (3) テーマについて説明をしたり、わからない所の質問に答える。
- (4) テーマについてのディスカッション(学生の母国にある同様のものの紹介、比較なども行われる。)

用意されたテキスト中、難しい漢字にはふりがなが付けられ、慣用的表現には下線が引かれている。使用されたテキストの一部を参考のためこの報告の末尾に引用する(参考資料1)。このクラスでは、テストとして学習した漢字にふりがなを付けさせたり、ひらがなを漢字になおさせたりなどの文字の試験が行われた。また、教材で使われた慣用的表現を用いて、200字位の作文を書かせた。

西条キャンパスで行われた「日本事情」のクラスも、主な教材はテレビ番組をビデオに収録したものであるが、この授業では、週一回ニュース番組を録画して用いた。多くあるニュースの中から教材に選択する基準としては、以下のことを留意した。1)日本人がその時に関心をよせる主なニュース、2)日常語が多く使われていること、3)日本各地の話題(日本人と自然のかかわりを示す四季、動物、年中行事、その他)、4)国際社会での日本の問題、5)中国人学生が多数であるので中国との関連ニュースも取り上げる。授業の運ばれ方は、

- (1) ビデオを見せる。
- (2) 文字化して用意されたテキストを学生に与え、もう一度テープを見せる。
- (3) 教師がテキストを読み、次に学生に読ませる。
- (4) 扱われたトピックについて説明をしたり、わからない所の質疑応答が行われる。
- (5) ディスカッション

用意される文字化テキスト中、難しい漢字にはふりがな、慣用的表現には下線がほどこされている。使用されたテキストの一部をこの報告の末尾に引用する(参考資料2)。

このクラスでは、毎週用意される視聴覚教材、テキストの外に、日本各地の話題が映される時には、地図が教室に持ちこまれ、さらに雑誌、書籍なども学生の理解を促すために補助的に用いられた。テストは小さいもので、毎週、前の週の復習の形で行われた。問題は主に中国人学生が日本語習得の時に苦勞をする漢字の読みに焦点が当てられたが、発音や聴解に関する問題が出題されることもあった。

ここに紹介した2クラスでは、いずれも教材ビデオの音声のみのテープが準備され、学生に貸与できるようになっていた。

これらの授業と東千田キャンパスの「日本事情」I-(2)は、どれも経験のある日

本語教育の専門家によって教授されており、日本事情を学びながら、同時に日本語能力も高めてゆけるように授業がデザインされているのが特徴である。この日本語教育の専門家による日本事情の教授法は、広島大学における「日本事情」講座の核となって、その発展に大きく貢献してきたものである。その上、62年度後期には、比較文化論の専門家によって日本芸術〔Ⅰ-(1)〕が講義され、Ⅱ-(2)では異文化コミュニケーションの専門家により授業が進められた。

なお、63年度に入り、「日本事情」のコースの数は変わらないが、東千田キャンパスでは、Ⅱ-(2)のコースで新たに日本語教育の専門家により、パーソナル・コンピュータ、ワープロなどに関する授業が行われている。このクラスでは、文学、社会科学を学ぶ留学生にコンピュータが日本社会のどのような所で、どのように利用されているかを、銀行や会社、工場、また一般家庭などを例にあげながら説明がなされている。さらにこのクラスでは、教材としてNHKテレビの「チャレンジ・パソコン入力：ABC」を録画したものやパソコン操作説明書に加え、留学生には難しい表現で記述されているコンピュータに関する資料が、教官自らの手で分かり易く書き直されて用いられている。このクラスでは、学生にコンピュータという新しいテクノロジーが日本文化の中で機能しているのを理解させるだけでなく、学生自身が借用語の多いマニュアルを読んでワープロを使用するという経験学習もさせるよう計画されている。小テストでも、コンピュータとそれの使用されている所でよく用いられる単語の意味が問われたり、短文で答えねばならぬ質問にも、これまでの文系学生対象の「日本事情」の授業では見られなかった新鮮なものが工夫して入れられている。

また、今年度に入り、Ⅱ-(2)のクラスでは、日本文化の諸要素、諸概念（例えば、家、歴史、経済、人間関係、非言語表現など）について、毎授業異なった小論文を読み、異文化コミュニケーションの視座より講義、討論がなされている。このクラスでは授業を通じて、留学生たちに、異なる社会制度、思考様式、価値観の存在を認識させ、彼等が実際に日本人と相互作用をする時に、母国で通用していたものの考え方や価値観では、摩擦の生じる可能性があることを自覚させようとする試みがなされている。このクラスでも経験学習の教授法が取り入れられていて、テストに代えて、学生たちがそれぞれ広島の中で発見できる日本文化を取り上げ、それについて自分で日本人に簡単な面接調査を行って、結果をクラスで口頭発表し、クラスメートの質問に应答するという責任が課せられている。

このように広島大学では、留学生の量的拡大と教育学部内での日本語教育に関する組織変化にともない、「日本事情」のクラスの数も増えると同時に、これまで発展向上に尽力のあった教授法に加え、多彩なアプローチが行われ始めている。さら

に広島大学で設けられている「日本事情」コースの全体像を検討するにあたり、上述のクラスに加えて、直接には「日本事情」のクラスではないが、上級・中級日本語で開設されている日本文学専門家によるクラス（上級，中級各1クラス）を入れなければならない。「日本事情」5クラスと、これらの文学関係の「日本語」2コースが、現在広島大学で留学生への日本事情教育の役割を果たしていると考えてよいであろう。また「日本事情」という科目とは別に、留学生日本語教育では、日本語・日本文化研修留学生のために、特別講義や見学（この報告書pp.47-52参照）のプログラムが組まれている。特別講義は歴史，経済，工学などの専門家による多角的な日本文化紹介講義として意義があり，見学は教室内での授業を越えて日本留学をしたからこそ学べる貴重な経験学習の場となっている。

3. 今後の課題

量的にも質的にも発展期にある「日本事情」であるが，改善すべき点を多く抱えていることも事実である。そのため，この最後の章に今後広島大学の「日本事情」担当の教官が検討を加えていかねばならない課題を整理しておく。

3.1. クラスの総合的体系化が必要か？

最初に文部省の「日本事情」についての規定を記し，基本的目標（留学生が留学目的を日本語で遂行するに足るコミュニケーション能力を持つようにすること）を挙げておいたその目標自体の到達が時間的にも制限があり困難を内包するものであるが，「日本事情」における理想的な日本文化理解教育は，以下のことを含むと考えられる。

- a) 一般日本事情（日本語専門の教官が教えるもの）
 - b) 日本の歴史および文化
 - c) 日本の政治，経済
 - d) 日本の自然，日本の科学技術
 - e) 日本人のコミュニケーション
- } （各科目専門家の教えるもの）

a)からd)までは，原土洋氏（“日本事情のとらえ方”「日本語教育」65号，1988，6参照）の意見であるが，e)は筆者の説で，「日本事情」の中で日本人のコミュニケーションの仕方や日本人が外国人とコミュニケーションをする時の特徴などを異文化相互作用の視座から教えるもので，留学生に日本人のコミュニケーションの仕方が彼等にとっては異文化のものであることを認識させようとするものである。

広島大学の「日本事情」では、留学生のコミュニケーション能力開発のための様々なアプローチがなされているが、それぞれのクラスは各教官の裁量にまかされている。そのため、それらのクラスを1年履習すると日本文化のどの側面をどれ位習得できるかといった体系制に欠ける。東千田と西条の両キャンパスの「日本事情」担当教官が定期的に連絡を取り合い、授業の内容について話し合うことも過去には殆どなかった。文化が複雑な具体と抽象を含む巨大な概念であるため、筆者自身の私見を述べると、ある程度の教官の自由で多種多彩なアプローチがあって良いと考える。しかし、その多様なクラスの中にも体系的な学習ステップがあれば、学生たちにとってはもっと計画的に学べるコースになるであろう。限られた時間とスタッフで「日本事情」の総合的な体系化は可能であろうか。検討の必要があるようである。

3.2 教材のなさ

現在広島大学で行われている「日本事情」の授業の中で用いられている多くの教材は、教官の時間と労力と熱意によって作成されている。時事問題関係をテーマにした1回限りの授業でしか使えないものも、毎週新たに作成され続けているのである。既製の論文、評論、エッセーなどが用いられていても、そのクラスに合うように教官によって他の教材と合わせ編集準備がなされている。また、日本文化の深さに触れようとすればするほど、既にある書物や論文の日本語は、殆どの留学生には難しすぎて読めないものが多く、ここにも教材探しのジレンマがある。

3.3 学生のニーズは？

学生のニーズは個別的なものであり、その全てが実現できるとは思えないが、学生数の増加にともない、彼等の「日本事情」に対するニーズも多様なものがあると想像される。学生たちがどのような期待や要望をこのコースに寄せているのか、来日前に日本文化に関することを学習してきているのかどうかなどを知っておくことは、今後の改善に必要であろう。教授法、教材作成の問題とあわせて検討されねばならない。

3.4 学生の授業への出入りの激しさ

通常、最初に登録した数の学生が学期の最後までクラスに残ることは殆どなく、3分の2か約半分位までに減少する。この現象の主な原因は、単位外にこの授業を取っている学生および研究生がいるため、学期が進むにつれ専門の研究が忙しくなり、そのため授業に来られなくなるというもの。また、その外に入学・帰国時が一

定でないことによる場合もある。このような原因による学生数の減少を教官は理解することができるが、学生の授業への出入りの激しさは、学期の間に教官と学生が授業に参加することを通して経験することのできるグループ・ダイナミックスの機運を削ぐ要因となる。留学生のコミュニケーション能力を高めるためには、優秀な教官と学生の高い学習動機がなくてはならないことは自明であるが、こういった学生の授業への出席状況をやむをえぬことと、このままにしておくのがいいのであろうか。

以上のように広島大学の「日本事情」のクラスは複数で、日本語教育および日本文化（文学を含む）・異文化コミュニケーションの専門家により異なる教授法を用いて教えられている。「日本事情」以外にも、日本文化を学べる特別講義や見学の機会も一部の留学生のためではあるが設けられている。広島大学の「日本事情」は、量的にも質的にも発展の途にあるが検討せねばならぬ課題も少なくない。留学生教育そのものが変化期にある現在「日本事情」もその例外ではなく、「日本事情」教育の理論的実践的な改善がなされねばならない。

<授業担当者一覧>

専任・兼任： 上原麻子 齊藤稔 水町伊佐男
非常勤： 奥田久子

参考資料 1.

ウルトラ アイ みんぼうふとん 眠法布団の術

- えー、3週にわたりまして、皆様から御提案いただいたテーマを選び、えー、いろいろと放送しておりますウルトラアイでございます。え、先週は接着剤を取り上げました。えー、この接着剤で付けまして4トンの牽引力のある蒸気機関車と、6トンの牽引力のある蒸気機関車で引っぱり合いをいたしました。接着剤が強くて離れませんでしたけれども、そんな時に真中にかかる力ですね、一体どの位になるか、ということだったんですが、えー、あれは4トンだというたいへん多くのお電話やらお便りをちょうだいいたしました。で、3月にSLをちょうどこのウルトラアイで取り上げますので、えー、その場ですね、いろいろとそれを探ってみたいと思います。どうも本当にお便りありがとうございました。え、さて、今日は布団でございますね。（山川）
- はい。（田中）
- えー、ゲストを御紹介いたしますと、いーい気持でお休みになってる大場ひろしさん。ちょっと、お目覚め。（山）
- おはようございます。（大場）
- 先生のは、これは何布団？（山）
- はい、えー、これは、あの、せんべい布団でございます。（大）

参考資料 2

① 10月20日

ひろしま 630

今晚は。ひろしま 630 です。今日は天気がよかったんですけれども、空気がひんやりしていました。

そうですね。上空に寒気が入り込んでいるためなんですけど、心なしか水道の水も冷たいような気がしました。

そうでしたね。さて、自由民主党の総裁選ですが、今日未明に決着がつかしました。私を含めましてテレビを見ていた方、きょうは一日眠かったのではないかと思います。その自民党総裁選のニュースからお伝えしてまいります。

自由民主党の次の総裁は中曽根総理大臣の裁定によって、島根県出身の竹下登氏に決まりました。竹下さんの生家のある島根県掛合町。興奮に包まれた今日の模様を松江からまずお伝えすることにいたします。（以下略）

② 12月11日

にっぽん列島 ただいま 6時

湖の岸に並ぶビル、水面から浮いて見えますね。琵琶湖では急に寒くなる11月の終わりから12月にかけて、こんな現象が見られるんです。大津からお伝えします。

さて、寒い冬には欠かせないなべ料理、そしてそのおいしさはなんといいおなべそのものにかかっているんです。土なべと金属なべの味の違いはどこから生まれてくるのか、実験で探っていきます。

びわ湖の浮島現象

御覧のようにビルがゆらゆらと浮いているように見えます。こちらはレンズのような形をした不思議な映像ですが、実はこれは琵琶湖大橋です。冬の初め琵琶湖に現われるこの神秘的な蜃気楼は浮島現象と呼ばれています。この映像は11月29日の朝早く、大津市から撮影したものです。大津市は琵琶湖の南にあります。ここから北におよそ15キロ離れた琵琶湖がもっとも狭くなっているところに、アーチのような琵琶湖大橋が架かっています。そしてその周辺には最近高層ビルが集中して建つようになりました。大津市からはこれらの建物が湖面に浮いて見えることがあります。

Ⅵ 日本語初級・中級特講

1. 対象

広島大学は昭和55年10月より教育研修留学生を受け入れているが、彼等のうち日本語能力の（ほとんど）ない者を対象に日本語を教育する目的で、第1期生受け入れと同時に教育学部に開設されたのが、「日本語初級特講」である。翌年4月には、その継続として同学部に「日本語中級特講」が開設され現在に至っている。ただ、「日本語初級特講」、「日本語中級特講」とも当初は教育研修留学生以外の留学生にも門戸が開かれていたが、昭和61年度の「日本語初級特講」より、他の留学生は履修できなくなっている。

その理由として、1)「日本語初級特講」、「日本語中級特講」が教員研修留学生の研修プログラムとしての日本語教育を目的としたクラスであって、他の日本語クラスとは異なったものであるということを明確にする必要があったこと、2)教育効果を上げるために、全ての日本語クラスの受講者数をできるだけ低く押さえる必要があったこと、3)「日本語初級」の拡張・充実で、教員研修留学生以外の留学生に対する初級レベルの教育のニーズに答えられるようになったこと等が挙げられる。

なお、初級・中級特講のプログラムは教育学部日本語日本事情が立案し、教員研修留学生の親委員会である「教員研修留学生研修実施委員会」が検討、承認をすることになっている。

2. 目的

社会においても研究においても効果的な生活活動ができるよう、話し言葉と書き言葉の両面にわたって日本語の訓練を集中的に行うことを目的とする。

3. カリキュラム・教育内容・講師

昭和61年度の日本語中級特講までは講師一人一人について教えるべき事柄が定められ、テキスト（「日本語1」東京外国語大学附属日本語学校）は進路の指針であった。しかし、61年度の日本語初級特講からは、講師はテキスト（「日本語初歩」国際交流基金）を順送りに進めることを原則にしている。これは、教えるべき事柄

とそれに費やすべき時間とのアンバランスを解消するためであった。特に、漢字を週に一度1コマ(100分)教えるというような事態は避けなければならなかった。また、各講師間の連絡を確実なものとするには、テキストを順送りに進めるのがよいと思われたからである。

日本語初級・中級特講は、発足当時それぞれ週12時間、週8時間で、前者は10月から2月まで、後者は4月から9月まで、長期休暇は学生便覧の「学期区分」に従うものであった。しかし、昭和61年度の初級・中級特講からは、事実上週当りの時間がそれぞれ13時間に、昭和62年度からは初級特講が14時間半、中級特講が14時間に増加している。初級・中級特講の時間数の増加は常に希望されていたところであったが、日本語研修コース、日本語教育学科の新設により、講師を多量に動員できるようになったからである。

4. 学生

1で述べたように、広島大学教員研修留学生のうち、日本語が(ほとんど)できないと認められた者である。その年度、国籍、現職、専門、受け入れ時の年齢別の内訳は次のとおりである(昭和57年度以前は不明)。

a. 国籍別

	58	59	60	61	62	計
タイ	3	1	3	2	3	12
マレーシア	1	1	2	1	1	6
フィリピン	1		1	2	2	6
インドネシア	2		2	1	2	7
メキシコ	2	2	1	1	1	7
中国	2	1		1		4
ビルマ	1	2	1	1		5
ブラジル		1	1	1		3
アルゼンチン					1	1
計	12	8	11	10	10	51

毎年初級レベルの日本語教育を受ける教育研修留学生は、タイ、マレーシア、メキシコ出身である。また、フィリピン、インドネシアからは昭和59年度、ビルマからは昭和62年度に偶然受け入れがなかった。以上の5ヶ国からは今後も初級・中級特講を受ける必要がある学生がやってくる可能性が高い。

これに対し、中国からの教員研修留学生の日本語レベルは年によりまちまちである。昭和60年、62年ともに、広島大学は中国からの教員研修生を受け入れたのだが、彼等は初級・中級特講を受講しなければならない程、日本語能力は低くなかった。また、韓国からの学生は、初級・中級特講を受講しなければならない程、日本語能

力が低かった例はない。この傾向は今後も続くであろう。

b. 現職別

		58	59	60	61	62	計
教育行政職	国レベル	1		2	3	2	8
	地方レベル	1		2			3
	学 校	1	1				2
教育職	就 学 前					1	1
	初等レベル	1		1	1	2	5
	中等レベル	3	5	4	2	2	16
	高等レベル	5	2	2	4	3	16
	計	12	8	11	10	10	51

教育行政職では国レベル、教育職では中高等レベルで働いている人が多い。ただ、メキシコ人は二つ以上の職を持っている場合が多く、昭和58年度では二人、昭和59年度と60年度では一人ずつ、中等レベルの学校の他に、小学校にも勤めていた。また、昭和62年度でも大学

の他に二つの職を持っているメキシコ人が受講している。

なお、中等レベルの学校と高等レベルの学校の教職に就いている学生は、総数では同じだが、昭和59年度と62年度の2回、その割合が逆転している。

c. 専門別

		58	59	60	61	62	計
教	育	5	3	4	1	3	16
教	外 国 語	2	2	1	3	1	9
	社 会				2	1	3
	理 科			2	1	1	4
	算数・数学	2	1	1			4
	体 育		1				1
科	技 術	2		1			3
心 理					1	3	4
教 育 工 学		1	1		1		3
幼 児 教 育					1	1	2
特 殊 教 育				1			1
そ の 他				1			1
計		12	8	11	10	10	51

教育学と外国語（日本語を含む）教育を専門にする学生が、毎年初級・中級特講に出席している。今後もこの傾向は変わらないであろう。また、これから心理学や幼児教育を専門とする学生が増えるかもしれない。

なお、インドネシアの「技術教員研修センター」からの受け入れは、昭和60年度で打ち切った

d. 年齢別

全体として25才から35才まで、特に31才から35才までの学生が多い、しかし、

	58	59	60	61	62	計
25 未 満			1			1
25 ～ 30	3	2	4	3	7	19
31 ～ 35	9	6	6	6	2	29
36 以 上				1	1	2
計	12	8	11	10	10	51

この年齢層と25才から30才までの学生数の割合は、昭和62年度で逆転している。一方、昭和61年度からは、36才以上の学生が受講しはじめ、語学という点で気になると同時に、特に昭和62

年度に、36才以上に分類された学生は、クラスの雰囲気についていくのに苦労があったろうと想像される。

5. 現状と課題

昭和62年度日本語初級特講は、学生10人、週当り14時間半、「日本語初歩」を順送りにやることを原則に、8人の講師が当たった。講師間の連絡は通常連絡帳によって行ったが、比較的うまくいった。また、進度も過去最高だった。しかし、テキストを順送りに進むという原則は、いくつかの問題を生み出しつつあると言わざるをえない。

昭和62年度の日本語初級特講では、8人の講師中1人には、口頭表現能力をつけさせるということで独自のプログラムに沿ってやってもらった。また、もう一人の講師には漢字練習を含めてもらうことにした。さらにもう一人はLLを担当した。問題は他の講師の方々の努力にもかかわらず、学生にそれと分かる程授業に独自のカラーを出すことが難しかったようである。従って、学生の目から見れば教授法の多様性が欠けているように映ったかもしれない。しかし、これはある意味ではやむをえないことである。テキストを順送りにやるからには、あらかじめ自分の担当箇所をよそくして準備をすることは難しいし、仮に予測できたとしてもテキストに教授法が左右されることが多いからである。

次にテキストを先に進めるところが日本語初級特講の目標になってしまった危惧がある。講師の方は個人個人で考えられておられたかもしれないが、コミュニケーション能力をどうつけさせるかという点について、全体としての意見統一がなかった。勿論、この点に関しては講師間に克服し難い見解の相違があるかもしれない。しかし、要はそれぞれの講師の持ち味をいかしつつ、全体の中で言語項目とコミュニケーション能力を確実に習得させることができるようなカリキュラムを立てることであろう。

さらに、ここで考慮すべきことは、学生が教員研修留学生で、自国では教員、または教育行政官であり、日本に教育の勉強をしにきており、1年半で帰国する前提があるということである。2で述べた日本語初級・中級特講の目的は、このような事情を反映しているのであろう。一方、テキスト「日本語初歩」は、一般的な日本語学習の前段階としての基本文型の習得を目的に編さんされたものである。したがって、「日本語初歩」を終えることが、学生の研究に役立つような日本語の習得に結び付くかどうかについて、当然の疑問が湧く。勿論、一般的な日本語の習得は研究活動に役立つには違いない。しかし、特に学生が1年半で帰国することを考えた場合、日常生活以外に、彼等の研究活動にも利益になるような日本語教育というものをもっと積極的に考えたほうがいいのではないだろうか。

注1 昭和57年度から60年度までの初級特講のみについて、記録が残っている。付録1を参照のこと。

一付録 1 -

時 間 割

初級特講

中級特講

初級特講

中級特講

	8:30 ~ 10:20	10:40 ~ 12:20
月	内藤(読解)	深見(作文)
火	奥田(文法・文型・読解)	奥田(発音・構文)
水	深見(発音・聴解)	奥田(文型)
木		
金	深見(会話)	菊池(文字)

(不 明)

	9:00	12:00
月	小 藤	内 藤
火	奥 田	奥 田 (内)
水	小 藤	小 藤
木		
金	小 藤	菊 池

	8:40 ~ 10:20	10:40 ~ 12:20
月		奥 田
火		奥 田 (内)
水		
木		内 藤
金		菊 池

昭和55年度

昭和59年度

	8:30 ~ 10:20	10:40 ~ 12:20
月	内藤(読解)	浮田(作文)
火	奥田(文法・文型・読解)	奥田(発音・構文)
水	深見(発音・聴解)	深見(文型)
木		
金	深見(会話)	菊池(文字)

(不 明)

	8:40 ~ 10:20	10:40 ~ 12:20
月	小藤(作文)	小藤(文型)
火	奥田(文法・文型・読解)	奥田(発音・構文)
水		
木	内藤(発音・聴解)	内藤(読解)
金	小藤(会話)	菊池(文字)

	8:40 ~ 10:20	10:40 ~ 12:20
月		奥 田
火		奥 田 (内)
水		
木		内 藤
金		菊 池

56年度

60年度

	8:40 ~ 10:20	10:40 ~ 12:20
月	深 見	内 藤
火	深 見	奥 田 (内)
水	浮 田	浮 田
木	深 見	
金	深 見	菊 池

	8:40 ~ 10:20	10:40 ~ 12:20
月	深 見	内 藤
火		奥 田 (内)
水	深 見	浮 田
木		深 見
金	深 見	菊 池

	9:30 ~ 10:20	10:40 ~ 12:20
月	小藤(作文)	内藤(読解)
火	奥田(文法・文型・読解)	奥田(発音・構文)
水		
木	内藤(発音・聴解)	内藤(読解)
金	小藤(会話)	菊池(文字)

	8:40 ~ 10:20	10:40 ~ 12:20
月		奥 田
火		奥 田 (内)
水		
木		内 藤
金		菊 池

57年度

61年度

	9:00 ~ 10:20	10:40 ~ 12:20
月	深 見	内 藤
火	深 見	奥 田 (内)
水	浮 田	浮 田
木	長 友	多 和 田
金	深 見	上 原

	9:30 ~ 10:20	10:40 ~ 12:20
月	上 原*	内 藤
火	浮 田	藤 部
水	浮 田	浮 田
木	長 友	多 和 田
金	上 原*	上 原*

	9:30 ~ 10:20	10:40 ~ 12:20
月	小藤(作文)	内藤(読解)
火	奥田(文法・文型・読解)	奥田(発音・構文)
水	小藤(発音・聴解)	小藤(文型)
木		
金	小藤(会話)	菊池(文字)

	8:40 ~ 12:20
月	小 藤
火	奥 田 (内)
水	内 藤
木	内 藤
金	菊 池

58年度

62年度

* 着任まで深見が担当

講 師 一 覧

専任・兼任

上原麻子	広島大学教育学部助教授	昭和62年度より専任
浮田三郎	広島大学教育学部助教授	昭和60年度より専任
奥田邦男	広島大学教育学部教授	昭和60年度まで専任
小脇光男	熊本大学教養部助教授	昭和58年度まで専任
多和田眞一郎	広島大学教育学部助教授	昭和62年度より専任
長友和彦	広島大学教育学部助教授	昭和62年度より専任
縫部義憲	広島大学教育学部助教授	昭和62年度より兼任
深見兼孝	広島大学教育学部講師	昭和59年度より専任

非常勤

奥田久子	広島修道大学教授	発足来（昭和62年度中級特講を除く）
菊地圭子		昭和61年度まで
迫田久美子		昭和59年度初級特講
内藤祐子	広島女学院大学助教授	発足来

Ⅶ 日本語・日本文化特別講義

1. 日本語・日本文化研修留学生

日本語・日本文化研修留学生は、文部省の奨学金を受け、各国の大使館及び他の公館が募集する国費の研究留学生で、昭和54年度から募集が始まった。研修期間は1年間で10月に来日し、9月まで各大学においてそれぞれの専門について研究する。おもに大学3年次在学学部生が中心で、年齢は19～25歳の間である。留学生の中でも最も若いグループといえる。広島大学では、昭和60年度から、以下のように日本語日本文化研修留学生を受け入れてきた。

年 度	国 別 の 構 成	学 部 別 の 構 成	計
昭 和 60	イギリス1, 中国1, ニュージーランド1, オーストラリア1, 韓国1	教育学部2, 文学部2, 学校教育学部1	5
昭 和 61	イギリス1, 中国2, タイ1, フランス1, アメリカ1, カナダ1, ドイツ1	教育学部4, 文学部2, 学校教育学部1, 経済学部1	8
昭 和 62	タイ3, インドネシア3, 中国2, 韓国1, フィリピン1, フランス1, オーストラリア1	すべて教育学部	11

このほか、大学推薦でイギリスより教育学部に受け入れているものが下記の通りあり、日本語・日本文化研修に参加している。

昭和56年1名, 昭和57年1名, 昭和58年1名, 昭和59年2名, 昭和60年2名, 昭和61年2名, 昭和62年2名

2. 日本語・日本文化特別講義

本プログラムは、昭和62年度より特別経費の交付を受け、日本語・日本文化研修留学生を対象に1期15時間の予定で開始された。日本語日本文化研修留学生は、各年10月に来日する。したがって、このプログラムは、昭和61年10月に来日した日本文化研修生に対して、その研修期間の半ばから企画され、実施されたことになる。

3. 日本語・日本文化特別講義の実施

3.1 昭和62年度前期

第1回目の試みとして、以下の計画で講義を行った。

5月27日(火)	日本の宗教「宗教と日本人の暮らし」	文学部助教授	桂 紹隆
5月30日(土)	日本の陶芸「窯元を訪ねる」	陶芸作家	西本 知
6月3日(火)	日本の経済「貿易黒字を生み出したもの」	経済学部教授	高橋 衛
6月10日(火)	日本の建築「日本の建築様式」	工学部教授	鈴木 充
6月13日(土)	日本の古典文学	文学部教授	稲賀 敬二
6月17日(火)	日本の美術「絵巻物」	教育学部教授	斉藤 稔
6月24日(火)	茶道	裏千家準教授	陣崎美知子
7月5日(土)	日本の伝統芸能「神楽」	文化財保存科学研究会常任理事	宇野 栄
9月5日(土)	日本女性史	広島県地域婦人連絡協議会	高浜 清子
9月9日(火)	日本の工業技術「技術開発はどのように行われるか」	総合科学部助教授	木本 忠昭
9月12日(土)	俳句	文学部教授	米谷 巖
9月16日(火)	日本近代史「日本の近代のあけぼの」	文学部教授	有元 正雄

しかしながら、学期の当初から計画にのぼっていなかったことと、学生への周知が徹底していなかったことから、留学生の参加は活発とはいえず、講師の先生方にご迷惑をおかけした場合もあった。

3.2 昭和62年度後期

昭和62年度後期には、新しい日本語・日本文化研修留学生13人をむかえ、新しい計画を持ってプログラムを実行した。日本語教育学科などの教官の協力を得、日本文化特別講義Ⅰとして以下の日程で講義を行った。（＊は留学生担当専任教官）

11月10日(火)	木坂 基(日本語教育学科)	「日本語の口語と文語」
11月16日(月)	＊長友 和彦(日本語研修コース)	「日本語文法」
11月17日(火)	斉藤 稔(日本語教育学科)	「日本の美術」
11月30日(月)	相原 和邦(日本語教育学科)	「近代日本文学」
12月7日(月)	＊浮田 三郎(日本語・日本事情)	「日本のことわざ」
12月15日(火)	岡崎 敏雄(日本語教育学科)	「日本人の話し方」

- 1月12日(火) 縫部 義憲(日本語教育学科)「日本人の外国語コンプレックス」
 1月13日(月) *多和田眞一郎(日本語研修コース)「日本の方言」
 1月25日(月) *上原 麻子(日本語・日本事情)「日本人のコミュニケーション」
 2月1日(月) 細田 和雅(日本語教育学科)「日本人のことばと心」
 2月8日(月) 沼本 克明(日本語教育学科)「日本の漢字」
 2月16日(火) 奥田 邦男(日本語教育学科)「日本語のスピーチフォーミュラ」

日本語日本文化特別講義Ⅰは、諸々の事情により次の年度の前期には開講していない。

一方、日本文化に直に触れる体験をさせるため、本学期から「日本文化特別講義Ⅱ」として、以下のような見学・実習プログラムも併せて企画し、実行した。テーマは「日本の伝統芸能」とし、それぞれの分野の専門家に直接講義をしていただいた。留学生も稽古などに参加して体験をただけでなく、日本人との交流もはかれた。

1月13日(木)	茶	道	裏千家準教授	陣崎美知子
1月20日(木)	華	道	小原流家元教授	山田 芳子
1月27日(木)	邦	楽	東京杵屋会長唄宗家派教授	杵屋六東治
2月3日(木)	日本	舞踊	花柳流師範	花柳 美杉
2月10日(木)	日本の	昔話	中国放送総合企画室部長	栗原 秀雄
2月17日(木)	書	道	学校教育学部教授	森井 一幸
2月24日(木)	神	楽	文化財保存科学研究会常任理事	宇野 栄

講師の方々には、非常に積極的に指導をしていただき、予定の時間を過ぎることもしばしばであった。

3.3 昭和63年度前期

見学のプログラムについては、本学期はテーマを「日本の経済・社会」という形で絞りこみ、広島地域の企業見学及び行政機関などを訪れ、講師に講義を受けることによって日本の経済・社会活動の一端を知る。ことを目的として、以下のような計画で見学及び講義を行なった。今回は、実地に見学に行くとともに、その方面の専門の講師を招き、講義・解説及び、留学生からの質問等を受けていただいた。

- 5月11日 日本の伝統産業 熊野の筆作り 仿古堂
全国の70%シェアを占め、伝統的な家内手工業が守られている熊野の筆作りの現場を見学するとともに、原材料の仕入れ先などから、国際社会とのつながりを考えた。
- 5月25日 日本の産業(1) マツダ株式会社 講師：経済学部助教授 森岡敬史
広島地域の基幹産業の一つである、機械工業を代表する企業を見学し、広島の産業構造、ひいては日本の産業構造についても討論した。また、留学生それぞれの国との関わり、企業における女性の雇用問題などについても討論した。
- 6月1日 日本の司法(1) 広島刑務所 講師：法学部教授 築間正泰
日本の司法執行機関を見学するとともに、専門の先生の解説を受けた。
- 6月8日 日本の司法(2) 広島地方裁判所 講師：法学部教授 築間正泰
前回に続いて日本の司法執行機関を見学するとともに、日本の裁判を実際に傍聴した。
- 6月15日 日本の市政 広島市役所・広島市議会 講師：市役所企画調整課
市役所公聴課、同国際交流課の協力をえて、市役所本庁舎において広島市の都市計画、将来計画などを聞き、広島の街作りについて意見を交換した。また、また、市議会の本会議場も見学した。
- 6月22日 日本の産業(3) キリンビール広島工場 講師：総合科学部助手
桜井直樹
- 6月29日 日本の産業(4) そごう百貨店 坂物流センター
中元のシーズンを前に、日本の物流のシステムがどのように働いているかを見学した。

4. 成果と課題

以上、昭和62年度より開始した「日本語・日本文化特別講義」の梗概をのべたが、根気の留学生についてはおおむね好評であったことは、参加者の減少が少なかったことでもうかがわれる。また、見学を取り入れたことによって、広島という地域社会の中での文化・社会活動と留学生との接点をつくり出すことができた。

一方で、「日本語・日本文化特別講義」のもつ課題は、「日本語・日本文化研修留学生」が抱えている問題全体の中で考えられなければならない。

(1) プランニングを行う機関が存在しないこと

広島大学では、現在のところ日本語・日本文化研修留学生は国際交流委員会を通して行なっているが、受け入れた後の研究プログラムについて組織的な対応ができておらず、基本的には、各々の指導教官の指導に任されている状況である。他大学では、日本文化研修プログラムのための委員会が組織され、プログラムも確立しているところもあるが、広島大学ではこの特別講義が初めての試みである。しかも運営母体がなく、日本語・日本事情の担当教官が「個人的」に運営している形となっている。したがって、日本文化研修に関する様々な問題点はすべてこの組織の不在から派生しているといっても過言ではない。以下、それらの問題点を具体的にあげる。

- ①実施の責任をどこが持つのが不明。
- ②見学先、講師依頼などを行う際に、個人的な関係だけでは限界がある。
- ③留学生に対して、プログラムがどの程度の強制力を持つのがはっきりしていない。
- ④講師への謝金、および見学等を行う場合の引率教官、参加者の旅費等の問題。

今後留学生総数の増加とともに、日本語・日本文化研修留学生も増加することが予想される（ちなみに、昭和63年度10月受け入れ予定は19名）ので、早急に組織を整備する必要があると思われる。

(2) 日本文化特別講義の企画方針について

以上のような経緯から、教育学部日本語・日本事情（昭和62年4月当時）で日本語・日本文化研修留学生を対象にプログラムを企画・実行することとなったが、ここでまず問題になったのは、「日本文化」とは何か、という問題である。昭和62年度の前期は、日本文化というものを広くとらえる形で宗教、経済、工業、芸能、文学、歴史などの多方面にわたる講義を企画した。また、昭和62年度後期からは、「日本語に関わる問題」、「日本の伝統芸能」「日本の政治・経済」などのテーマ別に絞って研修プログラムを企画した。前者は、第1回ということもあり、見当のつかないまま、文化に関わると思われる点を羅列した形となったが、どれも1回打ち切りのオムニバス形式であったために、その分野の概説としても時間が不足気味であった。一方、後者のように一つのテーマに絞っていくとその方面に興味のない留学生がでてくるという問題もある。「文化」という複雑な概念をいかに教えていくかは今後の課題である（日本事情の項を参照）。また、(1)

とも関係するが、プログラム自体が年間計画にそって前もって準備されなかったため、行き当たりばったりの観があることも否めない。

日本語研修コース

I ま え が き

中国・四国地域のそれぞれの国立大学の大学院で専門の研究をする国費研究留学生を対象とした、6か月の集中日本語（予備）教育コースである。1985年10月に開設された。開始時期は4月及び10月であって、教育学部で実施している。定員は、30名である。

その実践報告をするのであるが、そのまえに、このコースを担当するものとしての考え方・心構えなどについて若干述べておきたい。

日本語研修コースの先行例を見ると、日常生活に必要な日本語能力を付ける、かなりの日本語能力を付けて専門教育を受ける大学へ送り出すという目標を掲げて、運営されている。本コースにも似たような目標を掲げる。日本で生活するのに必要な日本語を身に着けさせるとともに、修了後大学院での研究ができるだけスムーズにいくよう、その橋渡しをする、と。

ところで、「6か月」という期間が、いかなる根拠によって導き出されたのか。大いに疑問のあるところであるが、我々の立場としては、これを「公理」のごとく扱うしかあるまい。求められることは、「6か月」を如何に捉えるか、「6か月」で何ができるか、何をしようとするか、どのようにしようとするかに絞られよう。

まず、「授業」時間数であるが、後のアンケート結果から妥当な線が導き出せそうである。

睡眠時間が7時間より短いほど、9時間より長いほど病気になる率が高くなるそうであるが、「授業」時間もこれと似たところがあるのではないか。短すぎてもいけないが、長すぎてもいけない。総じて、教授者は、「教える」ことに熱心である。当然そうであるべきであり、そうでなければ困るのであるが、ややもすれば熱心でありすぎる嫌いがある。多く（の時間）教えれば教えるほど効果があると考えたり、自分がこんなに一生懸命に教えているのに一向に成果が上がらないと相手をなじったりするなど、「教わる」ほうの立場、学習者の視点を忘れがちになるのではないか。自分がそのように教えられたらどうか。この視点を忘れないようにしたい。

「いかに教えるか」は、もちろん大事なことであるが、「いかに教えないか」も重要だと思われる。学習者が「できない」のは、教え足りないのではなく、教えすぎている、教授者が関わりすぎているのではないかと発想を転換してみることも必要であろう。

我々には、日本で日本語教育を行っているという大前提がある。一步教室を出れ

ば、そこは、日本語の野であり、山であり、河であり、海である。教授者が関わりすぎ、学生を教室に「留め置く」時間が長すぎると、実際に運用する時間が少なくなる。温室の花や養殖の魚を育てているようなことになる。目的によってはそれも悪くはなかろうが、我々は、教室の優等生の育成を志向しているのではない。普通の日本人と普通の日本語でやり取りのできる学生の育成を目指している。

Ⅱ 広島大学外国人留学生日本語研修コース

中国・四国地域のそれぞれの国立大学の大学院で専門の研究をする国費研究留学生を対象とした、6か月の集中日本語（予備）教育コースである。1985年10月に開設された。開始時期は4月及び10月であって、教育学部で実施している。定員は、30名である。

第一期から第五期までの修了生の国・性別・年齢・専攻は以下のとおりである。自然科学を専攻する者が多い。

第一期生（1985年10月～1986年3月）

国	性別	年齢	専攻	国	性別	年齢	専攻
1 イスラエル	男	28	農業経営学	8 タ イ	男	25	土 壌 学
2 イ ラ ン	男	30	数 学	9 ニューージーランド	男	26	心 理 学
3 インドネシア	男	27	農 芸 化 学	10 フィリピン	男	31	医 学
4 インドネシア	男	29	水 産 学	11 フィリピン	女	28	歯 学
5 エジプト	男	33	水 産 学	12 フィリピン	女	28	薬 学
6 ケ ニ ア	男	30	都 市 工 学	13 マレーシア	男	31	植物病理学
7 シ リ ア	男	25	歯 学	14 ヨルダン	男	22	電子工学

年齢は、1985年10月現在の満年齢

第二期生（1986年4月～1986年9月）

国	性別	年齢	専攻	国	性別	年齢	専攻
1 イスラエル	男	33	医 学	8 ギリシア	男	24	工学化学
2 インドネシア	男	34	林 学	9 ケ ニ ア	男	25	農 学
3 インドネシア	男	35	薬 学	10 タ イ	男	26	法 学
4 インドネシア	男	26	船 舶 工 学	11 タ イ	女	26	農 学
5 エジプト	男	33	農 学	12 バングラデシュ	男	24	医 学
6 エジプト	男	33	医 学	13 フィリピン	男	35	農 学
7 エチオピア	男	32	化 学	14 フィリピン	男	30	歯 学

年齢は、1986年4月現在の満年齢

第三期生（1986年10月～1987年3月）

国	性別	年齢	専攻	国	性別	年齢	専攻
1 アメリカ合衆国	女	22	商学・経済学	8 タイ	女	26	人文科学
2 インドネシア	女	29	獣医学	9 ビルマ	男	35	数 学
3 インドネシア	男	27	経営工学	10 ブラジル	男	24	林 学
4 オランダ	女	26	医 学	11 マレーシア	男	35	海洋測量学
5 グワテマラ	男	36	医 学	12 マレーシア	男	28	法学・政治学
6 ザンビア	男	37	薬 学	13 マレーシア	女	24	政 治 学
7 スペイン	女	25	医 学				

年齢は、1986年10月現在の満年齢

第四期生（1987年4月～1987年9月）

国	性別	年齢	専攻	国	性別	年齢	専攻
1 イラン	男	28	電気通信工学	12 タイ	女	25	商学・経済学
2 インドネシア	男	30	医 学	13 バングラデシュ	男	28	歯 学
3 インドネシア	男	32	機械工学	14 パナマ	男	31	医 学
4 インドネシア	男	28	農 学	15 フィリピン	男	34	歯 学
5 インドネシア	男	28	農 学	16 フィリピン	男	29	船舶工学
6 インドネシア	女	28	食物酵素学	17 マレーシア	女	28	商学・経済学
7 インドネシア	男	27	食物保存	18 マレーシア	女	28	土木建築工学
8 ウルグアイ	男	30	医 学	19 マレーシア	男	28	商学・経済学
9 ガーナ	男	34	商学・経済学	20 マレーシア	男	33	機械工学
10 コロンビア	男	30	医 学	21 マレーシア	男	28	農業経済学
11 スリランカ	女	31	商学・経済学	22 メキシコ	男	26	機械工学

年齢は、1987年4月現在の満年齢

第五期生（1987年10月～1988年3月）

国	性別	年齢	専攻	国	性別	年齢	専攻
1 アイルランド	女	23	経 済 学	11 タイ	女	26	農 学
2 インド	男	26	船舶工学	12 タイ	男	23	経 済 学
3 インド	男	26	工 学	13 チュニジア	男	26	工 学
4 インドネシア	男	29	医 学	14 ナイジェリア	男	25	工業化学
5 インドネシア	男	35	歯 学	15 バングラデシュ	男	33	医 学
6 インドネシア	男	26	農 学	16 ブラジル	男	28	心 理 学
7 エジプト	女	31	物 理 学	17 マレーシア	男	33	農 学
8 コロンビア	女	22	医 学	18 メキシコ	男	29	工 学
9 スーダン	男	34	農 学	19 レバノン	男	28	医 学
10 セネガル	男	27	地 学				

年齢は、1987年10月現在の満年齢

ちなみに、現在、第六期生23名（男19名，女4名）が在籍している。

このコースも、開設以来三年目を迎え、第六期生を送り出そうとしているところに来ている。この間を、「草創期」（第一期～第三期）、「転換期」（第四期～第六期）と呼ぶことができるとすれば、第七期以降を「充実期」にしたいと願っている。

「草創期」は、第一期「新調」・第二期「調整」・第三期「整備」という過程を辿り、「転換期」も同じように、第四期「新調」・第五期「調整」・第六期「整備」の道を歩んでいるといえる。（第七期以降「充実期」にしたいと述べたが、新たなる「転換期」が待っている可能性も高い。）その事情を以下に記す。

国費研究留学生を対象とした日本語予備教育を行っている先行大学の例を参考にしつつ、「広島大学外国人留学生日本語研修コース」の特色にしようとして取られた方法・方針のひとつに「クラス担任制」とでも称すべきものがある。

当初、日本語研修コースには、専任教官二名が配置され、教室も二つ用意された。その専任教官二人が、それぞれ「クラス担任」となり、非常勤講師の助けを得て、日本語教育を中心とした「クラス経営」を行う方式である。もちろん、二つのクラスは別々の行き方を取るのではなく、コース全体として調整・統一されるように配慮されている。（具体的方法については後述する。）

第一期から第三期までは、幸いに、学生数が13～14人であって、1クラス6～7人という理想に近いクラス形態を取ることができた。おかげで、「草創期」にしては評価に値する成果を上げることができたのではないかと自負する。

ところが、第四期から学生数が急増した。倍増とまでは行かないが、5割増ぐらいになった。定員が30名になっているから、数が増えたからといって恐慌をきたす言われはないのであるが、曲りなりにも築きかけた一定のレベルを維持・向上させ、また「クラス担任制」を保持しつつ、短期集中日本語教育の実を上げるために「三クラス体制」が必要とされた。それには、「クラス担任」たる専任教官、及びこれを助ける非常勤講師の確保や教室の問題など容易ではない問題があったが、関係方面の理解・協力・努力のおかげで、解決をみた。これを機に、時間割、日程等の変更をはじめ、全体的な改編が求められ、「転換期」を迎えたといえる。

詳しいことは省くが、このことが発端となって、それまで組織上別の「日本語研修コース」と「日本語・日本事情」との運営上の「協同化」が実現し、「留学生日本語教育」研究室としてまとまることになる。つまり、日本語研修コースに配置されている教官も「日本語・日本事情」の講義・演習を受け持ち、それぞれに共同責任をもつという、実質上の一体化である。

以下、具体的内容についてあらましを報告する。

1. 教育課程

授 業 科 目	時 間 数		
	前 半 期	後 半 期	計
文 型	54	36	90
文 字 ・ 表 記	36	36	72
発 音 ・ 会 話	36	36	72
聴 解 (ランゲージ・ラボラトリー)	36	36	72
講 読		36	36
文 法	18		18
日 本 文 化	18	18	36
特 別 指 導 研 究	36	36	72
個 別 指 導	36	18	54
専 門 用 語 解 説		18	18
計	270	270	540

2. 教科書・教材

第一期

- ①『日本語 I』（東京外国語大学外国語学部附属日本語学校編）とその付属教材
- ②『かな入門』（国際交流基金編）
- ③『ヤンさんと日本の人々』（国際交流基金編）
- ④『日本語教育映画』（国立国語研究所編）
- ⑤自主教材

第二期，第三期

- ①『日本語初歩』（国際交流基金編）とその付属教材
- ②『かな入門』（国際交流基金編）
- ③『ヤンさんと日本の人々』（国際交流基金編）
- ④『日本語教育映画』（国立国語研究所編）
- ⑤自主教材

第四期，第五期，（第六期）

- ①『日本語初歩』（国際交流基金編）とその付属教材

- ②『かな入門』（国際交流基金編）
- ③『ヤンさんと日本の人々』（国際交流基金編）
- ④『日本語教育映画』（国立国語研究所編）
- ⑤『日本語初歩 L.L.用練習テープ』（北海道大学言語文化部日本語系編）
- ⑥自主教材

3. 「授業」（講義・演習）の進め方

(1) 役割分担方式

日本語に関しては、各クラスに専任と非常勤とが一人ずつ付き、役割分担によるペアーを組んで、「導入」と「練習」の形で進めていくことを原則としている。主に『日本語初歩』の「本文」と「文の型」と自主教材とを使って、専任が「導入」を行う。それを受けて非常勤が、「まるうめ、言いかえ」などの部分と自主教材とを使って「練習」をし、定着をはかる。それぞれを進めていく過程において「文型」なり「文字・表記」なり「講読」なりを適宜配置して消化していく。したがって、「文型」の時間、「文字・表記」の時間などという固定化は行わない。四技能の連関をはかるうえからも、時間の有効利用のうえからも日本語上達のうえからも、「文型」「文字・表記」などを時間割上に固定する分離・独立方式は賢明とは言えない。「聴解」の場合は事情が異なる。

原則は変わらないが、多少の効率を考えて、第四期から、「導入・本文・練習」方式とも言うべきやり方に変えた。専任教官の一人が全クラスを対象に、主に「文の型」を使って、一斉に、「導入」を行う（火曜日と木曜日との「10:40～12:20」）。専任教官の「クラス担任」が主に「本文」を使って「導入」の補いをしながら「練習」との関連も考え、全体の調整・統括をはかる。

(2) 定期的進捗調整

週一回程度集まって、指導上の問題点、クラスの様子などを話し合いつつ、全体の進捗調整をはかっている。

進捗調整をはかる目的のはずが、教授法の問題から発して、日本語教育学、日本語学、言語学などの研究会のようになってしまっていることが多い。

第一期から第三期までは、専任二人非常勤二人の計四人が常時集まっていたが、非常勤を（時間的にも）そこまで拘束するのはいかなるものかという反省もあり、また効率のうえからも、第四期からは専任だけの集まりにし、必要に応じて適宜非常勤にも出席してもらうようにしている。そのかわり、それぞれのクラス担当の専任とそのペアーたる非常勤との連絡を密にすることでその欠を補う。

ちなみに、連絡・調整のための資料として、また、記録としても使えるようにと

「連絡ノート」なるものを作っている。形式は別に決まってないが、大学ノートに、その日に教えたこと、気付いたこと、クラスの様子、連絡事項、次の時間の予定などを書いている。

4. 科目内容

(1) 「日本文化」

日本人のものの見方・考え方、風俗、習慣などをはじめ、日本文化、日本事情全般にわたる講義がなされる。

初めのうちは英語で講義が行われるが、日本語の「授業」の進み具合に合わせて、日本語での講義に変わっていく。

教科書：『日本—その姿と心—』（NIPPON THE LAND AND ITS PEOPLE）
（学生社）

(2) 「特別指導研究」

「教室授業」（「教室内活動」）を踏まえて実地に日本語を使い、また、その経験を「教室」にフィードバックさせる目的をもって行う「教室外活動」である。

二週間に一回の割合で「見学」を実施している。行く先は、「広島市映像文化ライブラリー」、「広島城」、「縮景園」、「宮島」など広島地域の文化施設・名勝旧跡を中心にしている。

「見学」のない週には、ソフトボールやボーリングなどスポーツによる「教室外活動」を行う。

（「教室外活動」は、ストレス解消・運動不足解消の役割も担っている。）

将来的には「教室外活動」の一環として捉えるべく、ホームステイプログラムの試みもなされている。

第三期生の時に「加計町」において（86年12月）、第五期生の時に「加計町」（88年1月）と「庄原市」（88年2月）とにおいて、それぞれ一泊二日のホームステイを経験している。これらは、加計町教育委員会と婦人学級の方々、「庄原市の明日を開く婦人の集い」の方々の善意と理解とによって実現した。（ちなみに、ホームステイで御世話になった方々と留学生達との間では、その後、手紙や電話でのやりとりが続いている。）

(3) 「個別指導」

自学自習の形を取り、歩みの遅い学生に対する手当てをする時間として設けられたものであるが、第一期生の学生から、「自学自習は、うちでやるから、一斉授業にしてどんどん進んでほしい」という要望が出されたのを受け、以後そのようにしている。

(4) 「専門用語解説」

学生たちの専攻によって5～6グループに分け、関連する各学部の教官5～6名に、非常勤講師として、御願している。専攻が多岐にわたることが多いので、その調整が容易ではない。

日本語教育に関連した講義であるということと大学院での研究の準備になるようにということとを大原則として、講義に関する一切をそれぞれの講師に一任する。

(5) 「特別講義」

総復習と応用を兼ねて行う「日本語表現法」「日本語聴解法」「日本事情特別研究」である。具体的には次のような事柄を扱う。

レポートの書き方、手紙・葉書の書き方、辞書（国語辞典、漢和辞典など）の引き方、ビデオ教材使用「日本事情」講義及び、「成果発表」準備等。

(6) 定期試験

前半期中間試験 「文字」, 「文法・文型」

前半期期末試験 「文字」, 「文法・文型」, 「講読」, 「聴解」

後半期中間試験 「文字」, 「文法・文型」, 「講読」, 「聴解」

後半期期末試験 「文字」, 「文法・文型」, 「講読」, 「聴解」

（実施時期については、資料の「成果報告」参照）

（「文型」「文字・表記」「発音・会話」「聴解」「講読」「文法」の内容については、自明なので、省略する）

5. 成 果 発 表

コース関係者に、6か月の日本語研修成果を披露する。修了式当日、修了式の前に、修了式会場で行う。第一期のときは、日本語による「寸劇」を全員で演じたが、第二期以降は、一人三分程度の日本語スピーチを行っている。

第三期から原稿集を作成し、出席者に配布している。

6. 問 題 点

日本語研修コース対象者は、日本語「未習者」であることが大前提のはずであるが、本国で、あるいは、以前に日本で日本語を多少学習したことのある「既習者」が混じってくる。最近、その数が増える傾向にあり、またその学習期間も比較的長い者が多くなってきている。（その割には、習得率がさほど高くない。しかし、本人の「主観的習得率」はかなり高いので、扱いに苦慮することになる。）これが最大の問題だといえる。

受入れ基準を厳しくするか、未習者・既習者の別なく対象とするのであれば、そ

れに対応できるだけの組織的・財政的裏付けをするかの決断が必要になろう。

本コースでは、コースのまとまり（学生間のまとまり・連帯感）を考え、既習者を各クラスに均等に配置し「複式学級」的対応をしている。

資料 1

広島大学外国人留学生日本語研修コース規程

昭和60.7.9 規程第17号

制 定

広島大学外国人留学生日本語研修コース規程

（趣旨）

第 1 条 この規程は、広島大学が外国人留学生で日本語能力の不十分なものに対し日本語の予備教育を行うために開設する外国人留学生日本語研修コース（以下「日本語研修コース」という。）の実施に関し必要な事項を定めるものとする。

（研修資格）

第 2 条 日本語研修コースの研修生（以下「日本語研修生」という。）となることができる者は、次の各号の一に該当する者とする。

- (1) 国費外国人留学生制度実施要項（昭和29年3月31日文部大臣裁定）に規定する研究留学生
- (2) 前号に掲げる者のほか、外国人留学生で学長が適当と認めた者

（定員）

第 3 条 日本語研修生の定員は、30名とする

（研修期間及びその始期）

第 4 条 日本語研修コースの研修期間は6月とし、その開始時期は4月及び10月とする。

（実施）

第 5 条 日本語研修コースは、教育学部が実施する。

（日本語研修生の選考）

第 6 条 日本語研修生の選考は、教育学部教授会の議を経て、学長が行う。

（研修の許可）

第 7 条 学長は、前条の規定により選考された者で所定の手続を完了したものに、研修を許可する。

(教育課程)

第 8 条 日本語研修コースの教育課程は、別表のとおりとする。

2 前項に規定するもののほか、日本語研修コースの教育課程の実施に関し必要な事項は、教育学部長が定める。

(研修の中止)

第 9 条 日本語研修生が研修を中止しようとするときは、教育学部教授会の議を経て、学長に願い出てその許可を受けなければならない。

2 学長は、日本語研修生が疾病その他の理由により研修を継続することができないと認めたときは、教育学部教授会の議を経て、研修の中止を命ずることができる。

(修了)

第 10 条 学長は、日本語研修コースの教育課程を修了した者に対して修了証書(別記様式)を授与する。

(授業料等の額及び徴収方法等)

第 11 条 第 2 条第 2 号に規定する日本語研修生に係る検定料、入学料及び授業料の額並びに徴収方法は、法令又はこれに基づく別段の定めのある場合を除き、それぞれ国立の学校における授業料その他の費用に関する省令(昭和36年文部省令第 9 号)第13条の規定に基づき定めた額及び徴収方法とする。

2 既納の検定料、入学料及び授業料は、還付しない。

(細則)

第 12 条 この規程に定めるもののほか、日本語研修コースの実施に関し必要な事項は、教育学部教授会の議を経て、学長が定める。

附 則

この規程は、昭和60年7月9日から施行する。

資料 2

日本語研修コース成果報告

(第四期) 1987年度 四月～九月

期 日	授 業 内 容 等	見 学 予 定 等	備 考
4/14	開 講 式 オリエンテーション		
4/15 ~ 4/17	面接, 発音, ひらがな, 初歩文型		
4/20 ~ 4/24	L 1 ~ 3	4/24 見学 原爆資料館・平和公園	
4/27 ~ 5/ 1	L 4 ~ 6	5/ 1 見学 広島城・縮景 園・映像文化ライブラリー	4/29 公休日
5/ 4 ~ 5/ 8	L 7 ~ 9		5/4, 5/5 公休日
5/11 ~ 5/15	L 10 ~ 12 中間試験	5/15 見学 宮 島	クラス再編成
5/18 ~ 5/22	L 13 ~ 15	5/22 見学 錦帯橋・岩国城	
5/25 ~ 5/29	L 16 ~ 18		
6/ 1 ~ 6/ 5	L 19 ~ 20		
6/ 8 ~ 6/12	L 21 ~ 22 前半期末試験		
6/15 ~ 6/19	L 23 ~ 25	6/19 見学 ガラスの里	
6/22 ~ 6/26	L 26 ~ 27		
6/29 ~ 7/ 3	L 28 ~ 29	7/ 3 見学 尾道市	7/ 2 「専門用語解説」開始
7/ 6 ~ 7/10	L 29 ~ 30 中間試験		
7/13 ~ 7/17	L 31 ~ 32		
7/20 ~ 8/31	夏季休業		
9/ 1 ~ 9/ 4	L 33		
9/ 7 ~ 9/11	L 34	9/11見学 NHK広島放送局	
9/14 ~ 9/21	特別講義 期末試験		
9/22	成果発表 修了式		

日本語研修コース成果報告

(第五期) 1987年度 十月～三月

期 日	授 業 内 容 等	特 別 研 究 指 導 等	備 考
10/15	開 講 式		
10/12 ~ 10/16	オリエンテーション 面接, 発音, ひらがな, 初歩文型		
10/19 ~ 10/23	L 1 ~ 3	10/23 原爆資料館・平和公園	
10/26 ~ 10/30	L 4 ~ 6	10/30 見学 広島城・縮景 園・映像文化ライブラリー	
11/ 2 ~ 11/ 7	L 7 ~ 9		11/ 3 文化の日 11/ 5 創立記念日
11/ 9 ~ 11/13	L 10~11 中間試験		
11/16 ~ 11/20	L 12~14	11/20 宮 島	
11/23 ~ 11/27	L 15~17	11/27 錦帯橋・岩国城	11/23 勤労感謝の日
11/30 ~ 12/ 4	L 18~19		
12/ 7 ~ 12/11	L 20~21		「専門用語解説」開始
12/14 ~ 12/18	L 22 期末試験	12/18 ガラスの里	
12/21 ~ 1/10	冬季休業		
1/11 ~ 1/15	L 23~24		1/15 成人の日
1/18 ~ 1/22	L 25~26	1/22 尾道市	
1/25 ~ 1/29	L 27~28		1/28, 29 加計町ホームステイ
2/ 1 ~ 2/ 5	L 28~29		
2/ 8 ~ 2/12	L 30~31 中間試験	2/12 NHK広島放送局	2/11 広島市青少年 センター行事参加
2/15 ~ 2/19	L 32~33		
2/22 ~ 2/26	L 33~34	2/26 マツダ	2/27, 28 庄原市ホームステイ
2/29 ~ 3/ 4	特別講義 期末試験		
3/ 7	特別講義		
3/ 8	成果発表 修了式		

※ 「特別研究指導等」は、事情により、日時、内容に多少の変更を生じた。

資料 3

日本語研修コース関係講師一覧

第一期 1985年10月～1986年3月

専任	多和田 眞一郎	金本 節子	
非常勤	位 藤 邦生	迫田 久美子	難波 久佳

第二期 1986年4月～1986年9月

専任	多和田 眞一郎	金本 節子	
非常勤	位 藤 邦生	迫田 久美子	難波 久佳

第三期 1986年10月～1987年3月

専任	多和田 眞一郎	金本 節子	
非常勤	位 藤 邦生	迫田 久美子	千葉 苑子

第四期 1987年4月～1987年9月

専任	多和田 眞一郎	長友 和彦	
	浮田 三郎	上原 麻子	
非常勤	位 藤 邦生	上野 智子	菊地 圭子
	迫田 久美子	中川 正弘	西村 浩子

第五期 1987年10月～1988年3月

専任	多和田 眞一郎	長友 和彦	
	浮田 三郎	上原 麻子	
非常勤	位 藤 邦生	上野 智子	迫田 久美子
	中川 正弘	西村 浩子	

Ⅲ 日本語予備教育（6ヶ月）に関する調査

（1988年6月1日現在）

ここに掲載するものは、「広島大学教育学部留学生日本語教育研究室」が国内の日本語予備教育（6ヶ月）機関を対象に今年（1988年）6月に行ったアンケート調査の結果である。我々としては国内8大学全ての日本語予備教育機関に関する調査結果をここで報告したいと考えていたが、残念ながら、大阪外国語大学からは協力を得られなかった。従って、これは大阪外国語大学を除く7大学（広島大学を含む北海道大学・東北大学・筑波大学・東京大学・名古屋大学・九州大学）の予備教育機関から送られてきたアンケート調査に対する回答をもとにして作成したものである。アンケートの質問事項は、それぞれの機関の予備教育、及び予備教育一般の全体像が具体的な事実によって浮かび上がってくるように、我々予備教育に携わっている者が日頃関心を寄せている（と思われる）事柄の中から抽出した。

広島大学の日本語予備教育（日本語研修コース）は1985年10月に開始されて以来、この4月で6期目に入り、まもなく丸3年になろうとしている。この間、他大学との部分的な情報交換はあったものの、スタッフの入れ替わりもあり、まだ経験の浅い我々としては、他大学の予備教育の実情をあまり知らないというのが正直なところである。従って、他大学の予備教育の実態を知りたいというのは我々の素朴な願望であり、このような調査を思いついたのも、とりあえず他大学との比較の中で広島大学の予備教育の現状と課題を正確に認識したいという願望からであった。

今回の調査結果に対して、広島大学留学生日本語教育研究室としては、特に論評は加えないことにしたが、この調査結果は、我々の現状と課題を認識する上で様々な情報を提供しており、それなりに説得力があると思う。他大学の予備教育関係者、あるいは、このような調査に関心のある諸氏におかれても、この調査報告が、予備教育の現状認識の一助になることを心から願うものである。

(1) 日本語予備教育（以下、予備教育）の正式名称・所属・開始年月

大学	正式名称	所属	開始年月
北海道	日本語研修コース	北海道大学言語文化部（日本語係）	1983年10月
東北	東北大学教養部外国人留学生日本語研修コース	東北大学教養部	1985年10月
筑波	筑波大学外国人留学生日本語研修コース	筑波大学留学生教育センター	1984年10月
東京	（特になし）	東京大学留学生教育センター	1985年10月
名古屋	日本語研修コース	名古屋大学総合言語センター	1979年10月
九州	（特になし）	九州大学留学生教育センター	1985年10月
広島	広島大学外国人留学生日本語研修コース	広島大学教育学部	1985年10月

(2) 過去2年半の受け入れ留学生数の変動

大学	年	1986		1987		1988
	月	4	10	4	10	4
北海道		11	11	7	15	16
東北		9	13	14	10	9
筑波		23	25	28	26	26
東京		13	22	17	20	18
名古屋		20	25	22	26	19
九州		18	16	17	18	22
広島		14	13	22	19	23

(3) 予備教育に携わっている教官(数), およびその平均持ちコマ数

大 学		数	名 前	平均持ちコマ数	1コマの長さ
北海道	専 任	1	村崎恭子	6~7	90分
	非常勤	8	黒田八須子 伊福部由香利 菅由美子 神谷順子 山科紀子 石島満沙子 中川道子 伊藤祐紀子	4	
東 北	専 任	1	才田いずみ	4	90分
	非常勤	8	山内徳子 田中俊子 高橋紘子 高橋澄子 押谷祐子 岡崎正道 福島満理恵 奥山和子	4	
筑 波	専 任	3	大坪一夫 西村よしみ 戸村佳代	9.3	90分
	非常勤	13	加納千恵子 市川保子 小口叔枝 阿久津 智 三枝令子 酒井たか子 竹中弘子 本間倫子 石井恵理子 小林典子 清水百合 渡辺恵子 田中幸子	6	
東 京	専 任	2	川瀬生郎 菊池康人	1.5	50分
	非常勤	4		4.5	
名古屋	専 任	4	竹内俊男 水谷 修 土岐 哲 藤原雅憲	5	100分
	非常勤	7	越前谷明子 神田紀子 他	6	
九 州	専 任	4	上尾龍介 田村 宏 鳥井裕美子 市丸恭子	1.1	50分
	非常勤	9	北村憲治 竹内 章 森山日出夫 (以上3名兼担) 上林紀子 栗山昌子 古賀知子 西本恵司 原野亮子 葉 照子	7.5	
広 島	専 任	4	多和多真一郎 浮田三郎 上原麻子 長友和彦	7.5	100分
	非常勤	5	位藤邦生(兼担) 迫田久美子 中川正弘 西村浩子 戸田利彦	4.4	

注：上記の教官は，専任，非常勤とも，必ずしも，予備教育だけに携わっているとは限らない。

(4) 予備教育の総授業時間数、およびその内訳

大 学	総 時 間 数	内 訳
北海道	18週(504時間)	導入, 練習, LL口頭練習及び応用会話, 作文
東 北	20週(600時間) ほかに専門分野の日本語教育80時間	発話・文法・発音(300時間), 読解(50時間), 聴解(80時間), 個別発話指導(20時間), クイズ(30時間), 文字(30時間), スピーチ(10時間), 個別専門読解(14時間), 個別専門分野の日本語指導(80時間), 日本に関する講義(6時間)
筑 波	20週(600時間)	CAI, ドリル口頭練習, 会話, 漢字読み物, 専門(物理, 数学)(以上, 初級期270時間)ニュースやドラマの聴解練習, 専門の論文の読み練習(以上, 後半)
東 京	17週(614時間)	教室内での導入・練習パターンによる授業と, 所属研究科等で自分の専門の研究に従事しながら日本語を習得する活動プログラムに分けることができる。教室内学習435時間, 活動プログラム179時間
名古屋	22週(748時間)	導入段階(平仮名・発音の導入と定着, 等, 約50時間), 初級段階1(初級文法・会話・読解(1), 等, 約200時間), 初級段階2(初級文法・会話・読解(2), 等, 約200時間), 中級段階1(中級文法・会話・読解(2), 等, 約150時間), 中級段階2(専門分野別読解, 口頭発表, 約100時間)
九 州	18週(560時間)	発音・聴解(190時間), 文字(漢字を含む)(100時間), 文法・読解(200時間), 作文(50時間), 専門分野の日本語(20時間)
広 島	18週(540時間)	文型(90時間), 文字・表記(72時間), 発音・会話(72時間)聴解(LL)(72時間), 講読(36時間), 文法(18時間), 日本文化(36時間), 特別研究指導(72時間), 個別指導(72時間), 専門用語解説(18時間)

(5) 正規の授業以外の特別補講等の有無、および「ある」場合その内訳

	有(時間数)・無	内 訳
北海道	予算が余分について た時に行う	漢字訓練, ビデオ, など
東北	なし	
筑波	2コマ	予備教育生ですでに日本語力が相当あり, 正規の授業では易しすぎる ため, 当センターで行っている上級補講クラス(週7コマ)で学習し ている。他の予備教育生に比べるとコマ数が少ないので補講をしてい る。内容は労働問題, 税制に関する新聞記事
東京	なし	
名古屋	約30時間(年によ って違う)	話し方の個人指導, 初級文法の復習, など
九州	40時間	個人指導(重要部分の重点的練習), 作文指導, スピーチの練習, 書 道の基本練習, など
広島	60時間	教科書の中の特定部分の重点的練習, ビデオ教材による練習, 手紙の 書き方・作文の指導, 個人指導, スピーチの練習, など

(6) 一週間の時間割

北海道

	月	火	水	木	金	土
10:20						
11:50		クラス			L. L.	
12:40						
2:10						
2:20						
3:50		L. L	ミーティング			

東北

	月	火	水	木	金	土
9:00	午前の教材 (CMJ, ASJ, 他)		専門分野の 日本語指導	午前の教材		
12:10						
1:00	クイズ	ききとり ビデオ他		ききとり ビデオ	漢字 activity	1:45
	個人	Dialogue 読解		Dialogue 読解	ビデオ Dialogue	1:50
4:15	個人	Show&Tell		個人専門読解	個人専門読解	3:20

筑波

	月～金		月～金		
9:00	C A I	← 初級期 270時間 *火曜と木曜に専門 (物理, 数学)日本語 授業が追加される。	ニュース, ドラマ, etc. の聴解練習	← 後半	
10:15	ドリル 口頭練習				
11:40	会話			専門の論文 の読み練習 専門が近い グループに 分かれ個別 に指導する	
12:40	漢字 読み物				
1:55					
2:10					
3:25					

東京

	月	火	水	木	金	土
9:10						
10:00	初歩	初歩	初歩	初歩	初歩	活動
10:10						
11:00	初歩	初歩	初歩	初歩	初歩	活動
11:10						
12:00	(仮名)初歩	(仮名)初歩	(仮名)初歩	(仮名)初歩	(仮名)初歩	活動
1:10						
2:00	初歩	初歩	活動	初歩	初歩	
2:10						
3:00	初歩	初歩	活動	初歩	初歩	
3:10						
4:00	(仮名)初歩	V. T R	活動	L. L	(仮名)初歩	
4:10						
5:00	活動	活動	活動	活動	活動	

名古屋

	月	火	水	木	金	土		
9:00	1週～3週(平仮名・発音, 等) 3週～8週(初級文法・会話・読解(1), 等) 9週～14週(初級文法・会話・読解(2), 等) 15週～19週(中級文法・会話・読解, 等) 20週～21週(専攻分野別読解・口頭発表)						} 4時間	
6時間								12:50
								3:50

九州

	月	火	水	木	金	土
9:00	導入	導入	復習	導入	導入	復習・練習
50	導入	導入	試験	導入	導入	復習・練習
10:00	練習	練習		練習	練習	復習・練習
50	練習	練習		練習	練習	
11:00	練習	練習		練習	練習	
50	練習	練習		練習	練習	
12:00	練習	練習		試験問題解説	練習	練習
50	練習	練習		練習	練習	
2:00	練習	練習		練習	練習	
50	練習	練習		練習	練習	
3:00	練習	練習		練習	練習	
50						

広島

	月	火	水	木	金	土
9:30	L. L.	L. L.	L. L.	L. L.	練習	
10:20	発会	導入	発会	導入	個別指導	
10:40	会話		会話			
12:20	練習	日本文化	練習	個別指導	特別研究 指導	
1:10	練習		練習	練習		
2:50	練習	練習	練習	練習		
3:10	練習	練習	練習	練習		
4:50						

(7) クラス編成の仕方、および1クラスの平均人数

	能力別	能力別でない	能力別のクラスと能力別でないクラスがある	1クラスの平均人数（大小様々な授業形態がある場合は、1クラスの授業の平均人数）
北海道			○	7 ~ 9
東北			○(但し、大部分能力別)	4 ~ 5
筑波			○	6.5
東京	○			10人以内
名古屋			○	5 ~ 6
九州		○		7
広島		○		14.9

(8) 夏休み／冬休みの長さ、および休み期間中の指導

		長さ(週間)	休み期間中の指導
北海道	夏	4.4(31日)	
	冬	2.6(18日)	
東北	夏	2	日本語を用いて、日本人にインタビューする等の課題を与え、休み明けにフィードバック
	冬	2	夏休みに同じ
筑波	夏	2	なし
	冬	2	なし
東京	夏	6	特になし
	冬	2.5	特になし
名古屋	夏	1	短いので特になし
	冬	2	クイズを与えている。また、日本人との会話を推進させるための課題を与えることがある。
九州	夏	3.5	特になし
	冬	2	特になし
広島	夏	5	宿題(練習問題、日記、作文、等)を出す、それ以外は特に指導はしない。
	冬	3	夏休みに同じ

(9) 使用している教材

北海道	「日本語初歩」「日本語初歩文法説明」「日本語初歩漢字練習帳Ⅰ,Ⅱ」「日本語初歩練習帳」「日本語学習辞典」「日本語初歩LL練習テープ応用会話」
東北	「A Course in Modern Japanese I, II」(名古屋大学)「東北大学で作成したCMJ用復習教材」「新版 聞き取り」自主開発教材(音声テープ+タスクシート)「漢字シート」「漢字アクティビティシート」「読解教材」「ヤンさんと日本人々」「An Introduction to Advanced Spoken Japanese」
筑波	「きそにほんごかいわ」(筑波大学留学生教育センター作成 45課)「CAI漢字・文法問題--Main Text に準じたもの」「きそにほんごのかわの漢字」(留学生センター作成漢字教材)「基本漢字500」
東京	「日本語かな入門」「日本語初歩」「日本語初歩語彙索引」「日本語初歩漢字練習帳Ⅰ,Ⅱ」「日本語初歩練習帳」「日本語初歩文法説明」「日本語中級Ⅰ」「日本語漢字入門」「基礎日本語学習辞典」「ヤンさんの一日」「日本語教育映画基礎編」「日本語教育映画中級編」
名古屋	「A Course in Modern Japanese vol.1」「A Course in Modern Japanese vol.2」「A Course in Modern Japanese vol.3」「Kana and Kanji」「ヤンさんと日本人々」他、Xerox教材多数
九州	「長沼現代日本語1」(「語彙集」および“Grammar and Glossary” for ‘Basic Japanese Course’)「現代日本文1」(「語彙集」を含む)「練習問題集」(九州大学留学生教育センター編)「基礎漢字演習」(九州大学留学生教育センター編)「Simple Conversation in Japanese」
広島	「日本語初歩」「日本語初歩漢字練習帳Ⅰ,Ⅱ」「日本語初歩練習帳」「日本語初歩語彙索引」「日本語初歩LL教材」「日本語教育映画基礎編」「ヤンさんと日本人々」「日本のすべて」(三省堂)その他さまざまなハンドアウト

(10) 導入漢字・語彙(単語)数, およびその習得率

	導入漢字数 (約)	習得率(約)	導入語彙数(約)	習得率(約)
北海道	400	90%	1,500	90%
東北	380			
筑波	初級時 500 専門 200	60%		
東京	初級 380 中級 800		初級 1,400 中級 2,000	
名古屋	1,000 (専門読解文に現れる漢字を含む)		人によってまちまち	
九州	400		2,000	
広島	600		2,000	

(11) 習得度の測定法の有無, および「ある」または「開発中」の場合, その測定法の内容

	ある	ない	開発中	検討中	測定法の内容
北海道	○				定期試験(全3回)(文法・文字・聴解・作文)の点数で大体わかる。
東北		○			
筑波	○		○		文法:各週行う小テスト(8回)テスト(2回)のSP表による分析 開発中:(1)話し言葉の評価(2)センターの補講コース・予備教育の最終到達目標を定め,各コースそれぞれ4技能に関する評価を行う。
東京	○				1) 中間試験(文字・語彙, 読解・文法), 期末試験(文字・語彙, 読解・文法, 作文・聴解)の問題 2) 「作文の評価について」(『日本語教育』63号, 菊池康人参照)
名古屋			○		1) 会話力の測定:面接(ビデオ収録), タスクを与えて会話させる。(ビデオ収録) 2) 文法力の測定:CAI文法練習の結果を利用 3) 文法・読解力の測定:最終ペーパーテストによる(名古屋と筑波で実施)
九州		○			
広島				○	

(12) CAI等, コンピュータの利用の有無, および「利用している」または「開発中」の場合のその内容

	利用している	利用していない	開発中	検討中	「利用している」, 「開発中」の場合のその内容
北海道		○			
東北	○		○		1) 「利用してみた」と言ったほうがよいが, 平仮名学習のための recognition 2) 開発中:「聞き取りの基礎技能習得のためのCAIプログラム」科研費が交付されたので2年計画で開発する。
筑波	○				1) 主教材に準じた文法・漢字のドリルCAI 2) セイコー・エプソン, 当センター漢字グループ共同開発の漢字手書き入力CAI教材, および, セイコー・エプソン, 大坪一夫作成文法CAI教材(チュートリアル型)
東京		○			
名古屋	○				文法練習, 漢字の読みの練習
九州		○			
広島		○			

(13) 修了時に成績を出すかどうか、「出す」場合の出し方、および成績の取り扱い

	出す	出さない	「出す」場合、どんなふうに出すか	成績の取り扱い
北海道	○		3回の試験の点を1～2回目25%最終50%で最終評価を下す。	学生、学務、指導教官に報告、英文の成績報告書を本国へ報告
東北	○		技能別と総合判定、A、B、C、Dの4段階、Dは不可、クイズの成績中間・期末試験・授業でのパフォーマンスから判定、どちらかという仕上げりの状態に重点をおいて主観的につける。	運営委員会に報告（配置先大学で希望するところがあることがわかったので今期終了時には申し送るつもりである。）
筑波		○	修了時には出さないが、各小テストについて、各学生にコメントを書いて与える。	SP表による学生の成績を分析し、学生へのfeedback、また、教師の教え方の反省資料として扱う。
東京	○		期末に実施する試験の科目ごとに（文字・語彙、読解・文法、作文・聴解）百点満点のところ何点であるかを知らせる。	運営委員会に報告
名古屋		○	シンガポールからの学生に対しては出す。その場合、大きなテスト（だいたい5～6回分）を中心に、授業態度を加味してコメントする。名前は日本語学科主任、またはセンター長名である。	どこにも報告しない（コース修了後の日本語指導について、指示することがある。）
九州	○		毎週の試験の結果を素点で記入、専門日本語を四段階（A～D）で評価各技能に関する所見	各大学の指導教官に報告する。
広島	○		「文型・文法」「文字」「聴解」「購読」「口頭表現」「日本文化」「専門用語解説」別にA～Dの評価をつけ、所見を述べる。	学務係を通して各大学の指導教官に報告

(14) 教室での授業以外の諸活動

北海道	小学校見学(1日), 研修旅行(日研生も一緒に北海道地方のボランティア・グループの協力を得てホームステイし, 地域の日本人と交流する。2泊3日)
東北	見学旅行(日帰り), 運営委員との懇談会, 修了発表会(学長, 運営委員, お世話になったボランティア, 関係事務職員を招待)
筑波	研究所見学(筑波研究学園都市内, 日帰り2日間, 希望見学先により数班編成し全員参加), 日本語野外教育(茨城県内1泊2日, 全員参加)
東京	受講者はすでに本学大学院各研究科の身分を得ているので, 各研究科で実施する見学旅行等あれば, それに参加することができる。
名古屋	見学旅行(近郊), 工場見学(ノリタケ, トヨタなど, 日帰り), 研究旅行(京都1泊), ホームステイ(希望者のみ), ピクニック(近郊, 日帰り)
九州	研修旅行(1泊2日, 九州内または山口県等, 半年に1回), 近郊への見学旅行など(半年に2, 3回), ホームステイ(希望者のみ)
広島	特別研究指導の一部としての見学(広島県内, 2週間に1回程度), ホームステイ(年2回, 1泊2日, 希望者のみ), 合宿(年2回, 1泊2日, 全員参加, 広島市内の青年グループとの合同合宿), その他, スポーツなどリクレーショナルな活動を適宜行っている。

(15) 各予備教育機関の刊行物の有無, および、「紀要」等の論文集を刊行している場合, 非常勤講師は単独で, あるいは専任教官との共同研究者として, 投稿できるかどうか

		単独でできる	共同研究者としてならできる	できない
北海道	なし(但し, 副教材の開発は行っている。「日本語初歩」に準じた副教材すべて)			
東北	『東北大学日本語教育研究論集』	○		
筑波	『日本語教育論集』(毎年発刊)	○		
東京	特になし			
名古屋	特になし(但し, 言語センターには『言語文化論集』というのがあり, 専任教官が first author でなければならない。)		○	
九州	紀要(年1回)の刊行を準備中(原稿はすでに集まり, 印刷所へ回す段階)	○		
広島	なし(今年度から定期的に出すことを計画中)			

(16) 各大学における予備教育，および予備教育一般の改善点

北海道	
東北	<p>1) 東北大学における予備教育はほとんど全ての点に関して改善すべき点あり。</p> <p>①使用する教科書を地域特性に合った内容でコミュニカティブ・アプローチに適したものにすること</p> <p>②レベルに応じた教育，ニーズに応じた教育ができるよう教材・カリキュラムを充実させること</p> <p>③読解力をつけさせる教育をもっと効率よく行うこと</p> <p>④学生がプレッシャーを感じないで学習できるカリキュラムや環境を整えること。</p> <p>2) 予備教育を受ける学生を受け入れる時点での配置先大学と研修コースと自国にいる来日予定研修生との間の情報交換をもっと円滑に。(大学-文部省-現地大使館という情報の流れ方のパイプがどうもうまく機能していない例が多いので)</p>
筑波	<p>1) 現在の初級の教科書を改め，新しい教材を作成する。</p> <p>2) 最終目標の設定，および約 500 時間(日本語のみ)でどこまで達成するかという共通の理解がない。</p>
東京	受け入れた留学生に日本語能力のばらつきがあった場合に，柔軟に対応できるだけの施設や人員を保有できることが望ましいが，現在，不十分である。
名古屋	6ヶ月コース(実質は5ヶ月)という時間が適当かどうか検討する余地があるように思われる。また，日本語教育と専門教育が協力し合う必要がある。もしできれば，予備教育機関同士で教材開発，コース・デザインを実施する必要もあるように思われる。
九州	現在のスタッフ(特に専任教員)に対して，その本来の業務(日本語教育)以外の雑多な仕事による負担が過重であると思われるので，その軽減のためにも，学生指導担当(カウンセリング担当)教員の定員化が望ましい。
広島	日本語能力が均等(できればゼロ)の留学生が配分されるように受け入れるシステムを改善すること

(17) 各大学における予備教育の将来構想

北海道	
東北	現在，検討中
筑波	<p>1) 評価・測定法の充実，特に「話しことば」の評価法を検討していきたい。</p> <p>2) 多様な学生のために，個別指導・個別教育の方向をさぐる。</p> <p>①CAI，チュートリアル方式による自習教材の作成</p> <p>②JSP，専門に関する教材の拡充と開発</p>
東京	<p>1) 私費留学生にも門戸を開きたい。</p> <p>2) 中・上級コースを整備し，初級修了者のアフターケアも行いたい。</p>
名古屋	
九州	現在，本センターの建物を新築中であり，完成後には学生部補講の形で行っている一般留学生対象の日本語教育も本センター内で行う予定である。それにともなって，現在一部にとどまっている予備教育と学生部補講との間の交流(教師，教材，諸設備など)を緊密にし，全額的なレベルでの日本語教育の一元化を計り，将来的には本センターが予備教育にとどまらず，あらゆるレベルの日本語教育を統轄する方向での組織の改善を検討している。
広島	教育学部に「留学生教育・研究センター」を設立し，その中で統合・総合的日本語教育の一環として予備教育を行うという構想を現在検討中

この調査報告にある1つ1つの事柄は、日本語予備教育に対する各予備教育機関の主体的な関わりのその総体の中で、正当に解釈されるべきものであり、木だけ見て森を見ないような解釈の仕方、例えば、コマ数が多いから総体的によくがんばっているというような短絡的な解釈の仕方は、厳に慎むべきであり、我々はそのことを各予備教育機関およびこのような調査に関心のある関係機関に切望したい。

また、この場を借りて、今回このアンケート調査に協力頂いた各予備教育機関に対して、心から感謝の意を表したい。「広島大学留学生日本語教育教室」としては、今後とも、諸機関との積極的な情報交換を行うだけでなく、建設的な相互批判を歓迎しながら、より充実した日本語教育に一步でも近づく努力を続けたいと思っている。

あ と が き

「留学生日本語教育」という名称がようやく板に付いてきたこの頃、我々はいつに我々自身の研究報告書を持つようになった。本書はその記念すべき第1号である。

本書では、これまでの広島大学における日本語教育の歴史と現状が述べられているが、発足当時の様子を知る人は現在の留学生日本語教育の専任スタッフの中にはもういない。本号の編集に当たっては、当時の様子を知る先生方や非常勤の方々の惜しみない協力を賜ったことを、ここに記しておきたい。もちろん、本書の中に事実と反するものがあつたとしても、それは我々の責任である。

留学生の日本語教育を実施するに当たっては、非常勤・兼任の先生方はもちろんのこと、教育学部、本部、工学部の事務当局の理解と協力を得ている。また、見学等の実施も、広島県庁、広島市庁をはじめ、（公共、民間を問わず）関係機関の理解と協力がなければ不可能であつたであろう。さらに、我々は、日本語教育には多くの有志の方々の犠牲的な献身があることも知っている。いま、この場を借りてこれらの方々に心から感謝の意を表したい。

我々は、自らを磨くためにも、また、これらの人々の熱意に答えるためにも、第2号、第3号と刊行を続けていくつもりである。

平成元年3月1日

編集委員記す

執筆担当者一覧

概要	-----	浮田三郎
日本語初級	-----	長友和彦
”	-----	細田和雅
”	-----	岡崎敏雄
日本語中級	-----	多和田眞一郎
日本語上級	-----	浮田三郎
西条キャンパスでの日本語教育	-----	浮田三郎
日本事情	-----	上原麻子
日本語初級・中級特講	-----	深見兼孝
日本語・日本文化特別講義	-----	難波康治
日本語研修コース	-----	多和田眞一郎
日本語予備教育（6カ月）に関する調査	-----	長友和彦

広島大学留学生日本語教育 第1号

現状と課題

発行： 1989年3月1日

著者： 広島大学留学生日本語教育研究室

〒730 広島市中区東千田町1-1-89

広島大学教育学部

TEL (082) 241-1221(内2175,2176,2276)

FAX (082) 242-1563

印刷所： 有限会社 清弘社